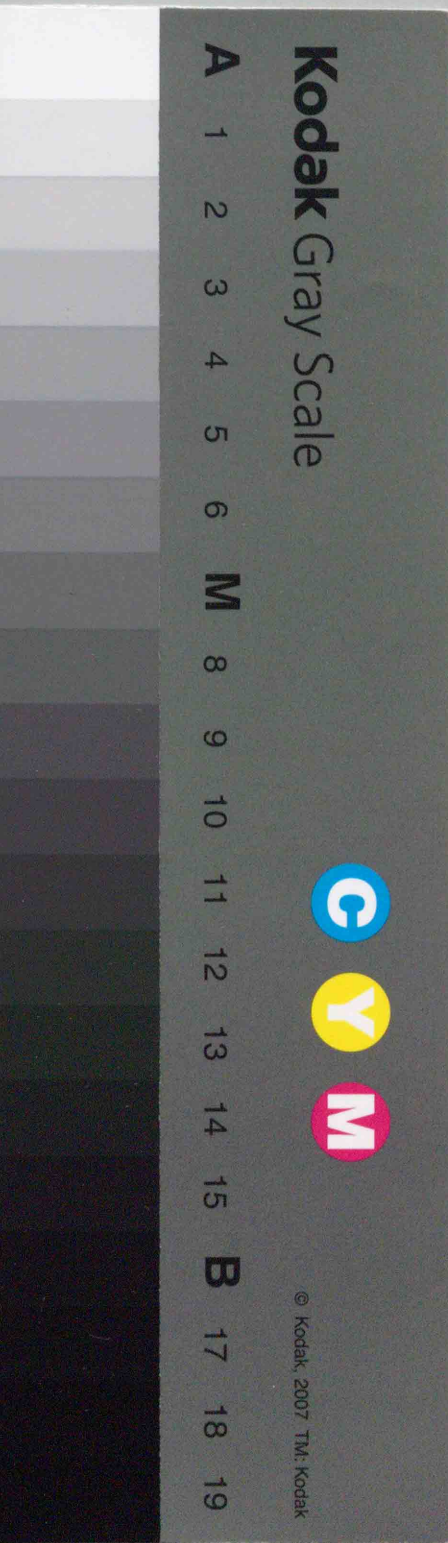
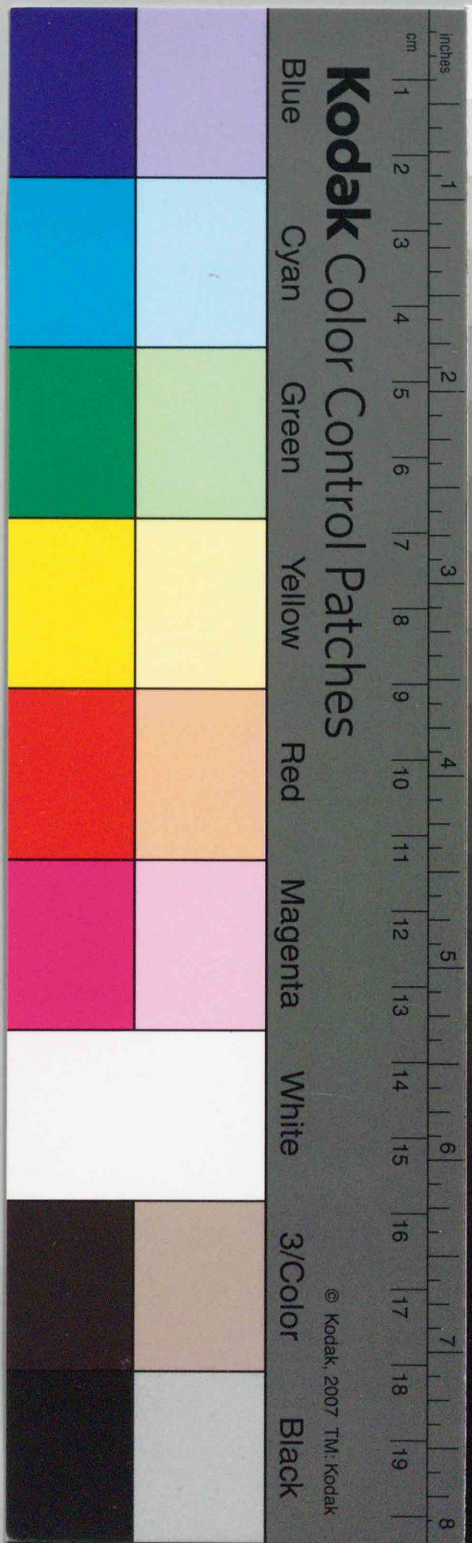
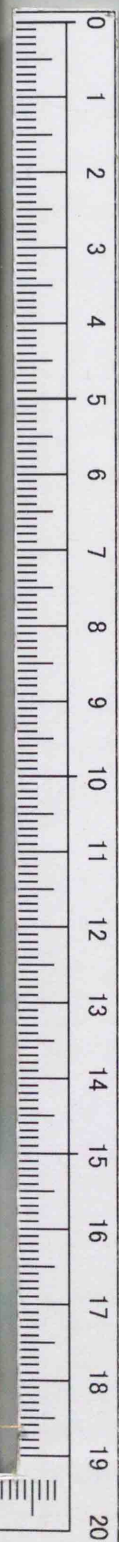


375.9
Ya20
資料室

編吉則波八
本讀語國代現
(版正修)
二卷

版藏館成關京東

教科
41-
2000



41424

教科書文庫

4
810
41-1927
20000 38373



© Kodak, 2007 TM: Kodak

© Kodak, 2007 TM: Kodak

教育部審定
中學國語教科用

教科書文庫
4
810
41-1927
2000038373

八波則吉編
現代國語讀本
(修正版)

東京關成館藏版

広島大学図書
2000038373


資料室

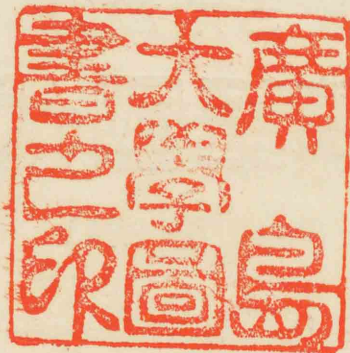
375.9
K20

現代國語讀本 卷二

目次

一四 恩……………	清浦奎吾……………一
二 天杯下賜(口語書簡文)……………	……………一〇
三 月の天橋……………	徳富健次郎……………二六
四 たのしみは(和歌)……………	橋曙 覽……………三
五 私の少年時代(自修文)……………	沼波 瓊音……………三五
六 母と蘆……………	西條 八十……………三三
七 天龍川下り……………	和辻 哲郎……………三九

目次



八川(詩).....	千家元麿.....	四
九渡り鳥.....	薄田泣菫.....	四
一〇友の消息(口語書簡文).....	五
一 ロンドンへ.....	正岡子規.....	五
ニ ロンドンから.....	夏目漱石.....	五
一一世界三都の印象(自修文).....	鶴見祐輔.....	六
一二二千七百メートル.....	七
一三コーヒー茶碗(詩).....	川路柳虹.....	七
一四ペンギン.....	杉村楚人冠.....	八
一五南洋探検.....	澁川玄耳.....	八
一六義士の討入.....	村上浪六.....	九

一七報恩美談(自修文).....	一〇七
一 感謝の火鉢.....	井上哲次郎.....	一〇七
ニ 感謝の報告祭.....	横山健堂.....	一〇九
一八新年.....	芳賀矢一.....	一一三
一九お日様の船出(童謡).....	與謝野晶子.....	一二八
二〇試作.....	一二〇
一 ストーヴ.....	一二〇
ニ ペンの音.....	一二三
三 きたたかぜ荒れて(詩).....	一二五
二一文章雑話.....	鳥崎藤村.....	一二七
二二藤樹先生.....	橘南谿.....	一二六

二三 雪のわかれ(自修文)……………(教育講談)……………二四
 二四 私のかはゆい白頭巾(詩)……………尾崎喜八……………二五
 二五 豊太閣……………矢野龍溪……………二五
 二六 八道の山(詩)……………大町桂月……………二六
 二七 安宅……………坪内逍遙……………二七
 二八 三月……………吉田絃二郎……………二七
 二九 三等列車……………松岡讓……………二八
 三〇 平民宰相立志物語(自修文)……………(東京日日新聞)……………二八
 三一 功名心……………竹越與三郎……………二九

附録
 常用略字……………一



現代國語讀本 卷二

一 四 恩

清浦奎吾

私は自分の官途上に於て四恩といふことを感じて居る。四恩については、平重盛が其の父浄海入道を諫める時にも、「世に四恩あり。」と説いたのであるが、私の感じて居る四恩はこれと違つて居る。君主の恩は申すまでもないことではあるが、私は官途上に於て、親の恩について最も深く感じて居る。私の生家は格別貧家といふ程ではなかつたが、無論

清浦奎吾
 熊本縣の人、
 嘉永三年生、
 子爵、樞密院
 議長
 浄海入道
 平重盛

今日
この文は大正
十一年の作で
ある



清浦奎吾

また富家といふことは出来なかつた。而も私は兄弟六人中の五番目であつたから、學資も不十分であつたし、且親の遺産として相續した物は何もなかつた。併し、唯一つ如何なる財産にも優る所の極めて健康な身體を授かつた爲に、官途四十九年間の今日まで、終に殆ど病氣といふ病氣はしたことがなく、人一倍の勉強も出来、また今日七十三歳の老齡に達しても、なほ矍鑠として健康を保つて居る。此の健康は活動の資本とも謂ふべきであるから、第一に親の恩を最も深く感じて居る次第である。

水本成美
明治十七年
歿、年五十四
昌平學問所
昌平、といふ、江
戸湯島にあつ
た徳川幕府の
學問所

追感四恩
奎堂



清浦奎吾筆蹟

第二には、私は今日でこそ好々爺と見られて居るが、これでも少壯時代には頗る覇氣の強い強情張りで、随分人と激しく議論もし衝突もしたことがある。所が、或日、時の元老院議員水本成美翁に招かれた。翁は江戸の人、昌平黌出身の學者で、薩摩公に抱へられ、後朝廷に召されて元老院議員にもなつた程の有徳な君子であつたから、私は師父の如く尊敬を拂つて、常に其の教を受けて居つた。さて、私は翁の招によつて其の宅を訪問すると、打寛いだ話で、お前は何事も誠に良く出来るが、あの短

上の事と批判するは明友の事と云り
 他人を憎むべからず、愚成者をあなどり
 を取し事むかしも有事、慎むべし

話夜御營柳本寫

氣な、むかつ腹を立てることは宜しくない。短氣は損氣といふことがある。將來立身出世すべき有望な人が、短氣の爲に身を過るのは惜しいことである。之を見なさい。」と言つて、一部の寫本を渡された。

其の寫本は「柳營御夜話」といふ本で、徳川八代將軍吉宗公

が、夜、近侍の若侍などに話して聞かされた事柄を、澁谷隱岐守といふ近侍頭の人が筆記したもので、其の中に、翁が「此處を見よ。」といつて印を附けられた二廉がある。其の文は次のやうである。

一、短氣なる者は事を爲損じ身を失ふこと多し。我が性質短氣なりと知らば、隨分堪忍の心を用ひ、禁め慎むべし。短氣は大方我儘より出づるものなり。名人の上には嘗て之なきことなり。

一、昔、數度武功の譽ある老士あり。若き人々、武功物語を所望しけるに、老士語つて曰く、某若き時にさしたる武功はなし。天性愛敬ありて人に善く思はれし故に、少しの

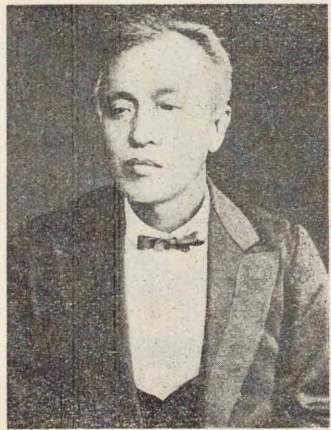
巧言令色
巧言令色鮮矣
仁(論語)

山縣公
名は有朋、
陸山
口縣の人、
軍大將、
公爵、
大元帥、
十一年、
十五年、
八年

働をもよく執成されて、思はず譽を得たり。人は愛敬あるがよし。」と語りしとかや。殊勝の物語なり。そして、翁は「士たる者は腕を扼し肩を聳かして強がるばかりが偉いのではない。巧言令色は孔子も之を戒められたが、吉宗公の戒にもある通り、人には愛敬が最も大事であるから、能く氣を付けなさい。」と言聞かされた。

翁の此の詞には私も非常に感動した。殊に時と場合が最も自分の頭腦に印象し易い機會であつたから、深く之を服膺して、爾來その修養に努めた。其の結果として、自分の性質は大いに變化して、頗る寛容温厚に傾いて來て、以前短氣過激を戒められた私が、後年には、山縣公から、君は餘り圓

白根專一
山口縣の人、
男爵、
明治三
十五年、
十一年、
五年



水本成美

必ず身を過つたであらうと思ふ。想うて此に到れば、實に翁の恩の深いことを感ぜずには居られぬ。即ち第二には先輩の恩を擧げる次第である。

第三には朋友の恩。私は益友として尊敬する友達を可なり多く持つて居るが、其の中でも、内務省で同勤して居つた白根專一君は、刎頸の益友で、餘程恩を受けたことがある。

私が芝西久保城山町に新に邸宅を構へ、其の落成祝に四五人の親友を招待した時、白根君は、清浦君、斯ういふ立派な家に住んで宜いかい。」と質し、それから御馳走が運ばれた所が、



白根 一

「斯ういふ贅澤なことでは清浦家は滅亡だの。」と、冗談のやうに、併し頗る力の籠つた詞を發せられた。何でもない詞のやうだけれども、私は深く感得する所があつて、其の結果、今日までに大なる利益を得た。即ち第三には朋友の恩を擧げる次第である。

第四は時世の恩。時世の恩といへば妙に聞えるが、時世

が暗に人を指導し、人の知識を啓發し、人をして之に順應して働かなければならぬやうに促す効力は、實に甚大なものである。私が今日まで色々と働くことの出來たのは、全く時世の賜で、時世は私に取つてまた大恩人であると謂はなければならぬ。是で都合四恩になる。

恩はこれを報じなければならぬ。親から健康な身體を授かつたのは寔に有難いことであるから、其の恩を報ずるのには、其の授けられた身體をなるべく善く養生して、不健康に陥らぬばかりでなく、益之を健全にして、活動に耐へ得るやうにしなければならぬ。「身體髮膚、享之、父母、敢不毀傷、孝始也。」と聖人も説かれて居る。また、先輩及び朋友の誠意

身體髮膚
孝經に於る語

的教訓・忠告等に對しては、自分も亦誠意を以て能く之を服膺し、其の教訓・忠告を無にせぬやうに努めるのが、即ち先輩・朋友に對する報恩の道である。そして、時世の恩に報ずるのには、時世に啓發された知識を以て、よく時世に順應するやうに努めて、時世の必要に應じて力を盡さなければならぬ。私は及ばずながらも、以上の四恩に對して、なるべく之を報ずるやうに心掛けて居る。

二 天杯下賜

天杯下賜！ 母上様、お目出たう存じます。遙にお祝ひ申上げます。

○本課は大正四年の作である

縣廳こゝは石川縣廳を指す、高等學校第四編者、當時と居て、金澤市つた

一昨年
大正二年

八十歳以上の長壽者に天杯を下賜される旨が、新聞紙上に傳へられた時、私は飛立つやうに喜びました。そして、取敢へず兄上に御祝狀を差出しました。すると、兄上の御返事に、残念なごころには、六個月不足のため其の數に洩れられた。ごありました。私は非常に落膽しまして、縣廳に、ごの縣下でも、天杯下賜は満八十歳以上か否かを尋ねに參る積りにきめてゐました。所が、翌朝の新聞で、數へ年で宜しい、調べ直せごの恩命があつた由の記事を見て、母上様、實に私は蘇生しました！

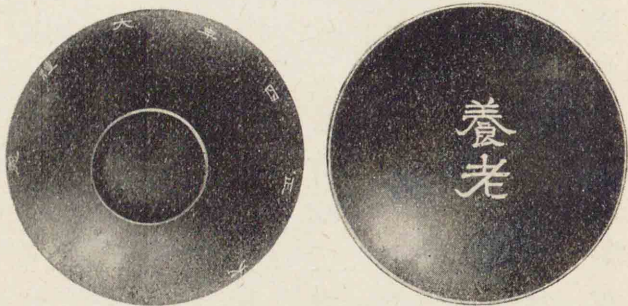
蘇生と言へば思ひ出します。一昨年の夏、あなたが九死一生の場合、私はあなたの枕に取付いて、おつ母様、あな

故郷有母
次の句は「旅
館無人暮雨
魂」藤原定家
の愛吟
ふるさとに
編者の作

たは私の力です！」ご、無我夢中に叫びました。其の聲が
昏睡状態のあなたのお耳に響きまして、此の皺くちやの
婆を、子なればこそ力にも思つて居るのか。「ご思はれ、それ
からあなたは、出来るなら助けて下さい。」ご、氏神様に祈願
なされて、奮發してお薬も飲まれ、お粥も啜られ、そして漸
く恢復なされたのだご、斯うあなたから後日承つたので
す。果して私が其の刹那「おつ母様、あなたは私の力です
！」ご叫んだか否か、私の記憶には判然しません。併し、母
上様、あなたは今でも私の力です！

「故郷有母秋風涙。」此は實際です。「ふるさくに老いた
る母の在すなり、いたくな吹きそ秋の夕風。」此は赤子の

大正四年大禮
恩賜



御即位禮記念養老天杯

至情です。たごひ、あなたの腰は曲
り、視力は衰へ、歩行は自由でなくて
も、我に母あり！」ごの誇が、如何に遊
子の意を強くして居ることでせう。
況や八旬の高齡で尚且壯者をも凌
ぐあなたの御健在はよ！ 母上様、
實にあなたは私の爲には千万人力
で、おあり遊ばします！

母上様、老人は家の寶であります。

で、至尊におかせられても、先づ老人を御愛撫遊ばすので
す。聞く所によれば、我が國は世界でも名高い長命國だ

此の度
大正四年十一月十日
陛下御即位禮

さうです。此の度天杯下賜の光榮に浴する高齢者が、四十万人にも及ぶさうです。「養老」の朱杯に「酒肴料」までお添へ遊ばされるごか承ります。四十万人に天杯と御酒肴料、これだけでも大した御費用かご存じます。これを思へば、子たる者、孫たる者、親を慰め、祖父母に仕へないで何ごしませう。孝が即ち忠です。親に仕へるのは君に仕へる所以です。母上様、私ども同胞があなたに盡すのは、恐多くも今上陛下の大御心に副ひ奉るのです。これをおもうて、私は幾夜か感涙に枕を濕しました。畏くも陛下は、何縣何郡何村大字何字何ごいふ片山里のあなたをば、非常に御鄭重に御愛撫遊ばされます。然るを、私、子た



(下陛下時當) 皇天正大

(下陛下時當) 下陛下大皇

る私が、あなたにこれだけ盡して居りましたらう。思へば慚愧に堪へない次第です。端書一枚であなたの御心を安めることが出来た時にも、あゝ此の不孝な私は、いやな夢を見たが達者か。と、あなたに問はれたことさへありました。

母上様、始めて夢が覚めました。どうぞ達者でゐて下さい。あなたは私の力です！そして、私もあなたの力になります。別封、其の一部は氏神様への御神酒料です。其の餘りはあなたのお友達に一献差上げて下さい。氏神様のお蔭です、御近所の方々のお蔭です。お友達と御近所の方々、皆して陛下の万歳をお祈り下さい。私も

あなたのお蔭、皆様のお蔭、氏神様のお蔭によつて、地方賜
饌の光榮に浴します。謹んで陛下の万歳を祝します。

三 月の天橋

徳富健次郎

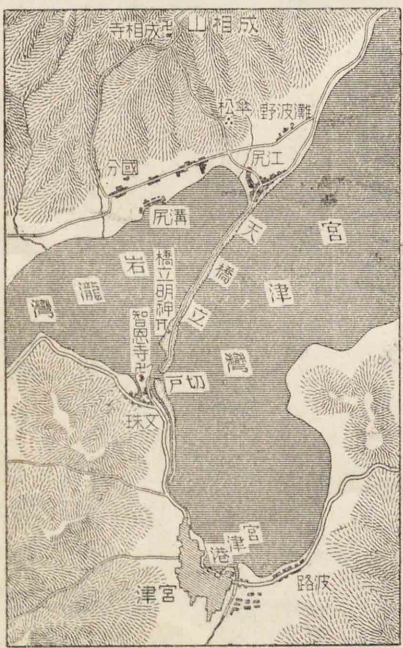
今宵は陰曆十月十四日の月夜である。文珠堂の附近は
松影で墨のやうに黒い。こゝに俚を待たせて、天橋に渡る
べく舟に乗る、所謂切戸きりどの渡しである。

ぎいと艫が響いて、舟は墨染の濃い松影から、白々とした
月下の海に出た。海といつても、浅い洲の水である。何と
いふ好い月夜か。雲一つない空にだけ照るかと思ふと、水
中に天があつて、其處にも月は璧のやうに光つてゐる。何

徳富健次郎
熊本縣蘆花
蘇峰の弟、生、
明治元年、
文珠堂
文珠堂の別名
切戸
今、吉津村大
字、文珠の海濱
橋立の南にあ
る狭水道の名

といふ清い水か。月明りにも水底の砂が分明に數へられ
る。此處は橋立切戸の渡しか、若しくは天の河を今渡つて
ゐるのではあるまいか。船頭よ、緩やかに舟をやつてくれ、
もつと徐かにやつてくれ。しかし、いかほど徐かに舟をや
つても、彼岸は近い。するくくと舟はもう天橋の渚に着い
てしまつた。

舟から上つて踏む白
砂は、もう天橋立である。
こゝらは植ゑついて間
もないと見え、松は稚木
で疎らである。月光に



雪と輝く砂を踏んで、だん／＼奥へ入つて往く。歩むにつれて松影はだん／＼深くなり、はては月の光よりも松の影が多くなつた。

何といふ明るい月だらう。仰げば、松の一葉々々が白金のピンを數へるやうに讀まれ、俯く砂には、
また一葉々々の影が黒く鮮に讀み
得られる。

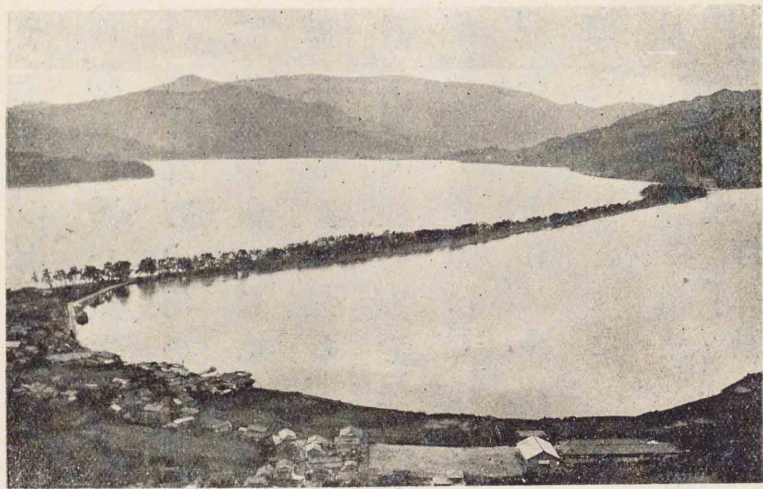
徳富健次郎自署

往るはつた

妻
名はあい、
治七年生、
明

松間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立ち、妻は砂に蹲んだ。余も黙し、妻も黙してゐる。ひつそりした天、橋立に人籟絶えて、たゞ何處からともなくざあ／＼といふ響が聞える。松風か。否、足下の松影は墨もて描いたや

與謝の海
京都府與謝郡
黒崎・鷺崎間
の入海



天ノ橋立

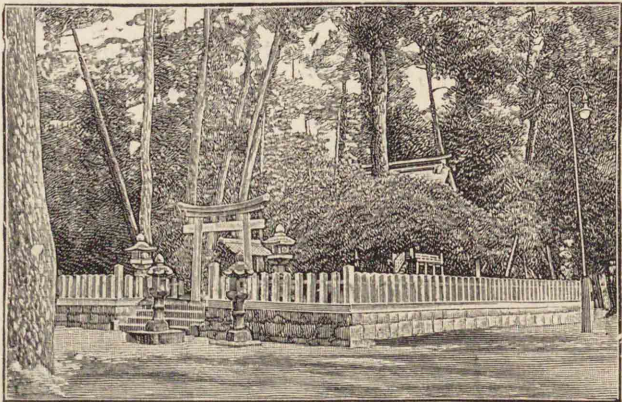
うに少しも動かない。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐める響に外ならないのである。その響に牽かれて汀に出て見る。其處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。並んで腰を掛ける。月下に仄白く眠る與謝の海、その懷には璧のやうな月を抱き、寢息かとはかりざぶりまたざぶりと白砂に碎ける漣は、まるで眞珠を零す

宮津
京都府與謝郡

やう。海の南に半圓形に山根に沿うて、紅寶石ルビーや琥珀の光が點々と灣を縁取つてゐるのが宮津の町である。
ふと此方の海の上に不思議なものが現れた。晃々とした明珠の幾段にも列んだ彪大な横長いものである。龍宮城の出現。と見る間に、それは宮津の方へ動いて行く。やや暫くその行方を見送る。龍宮城はかの宮津灣頭百千の龍燈煌めくあたりにぴたりと附いてしまつた。龍宮城と見たのは、それは今日の最終連絡船が宮津を指して行くのだつた。あとはたゞ熨おのしたやうな與謝の海。照りまざる月の空と靜に相見えて相抱き、一里の松原枝も鳴らさない天、橋立の長い汀に沿うて、ざぶりまたざぶりと漣がさゞめく

ばかりである。

汀から松原に戻つて、奥へくと砂路を歩む。さくくと砂を踏む足音の絶間に、波のさゞめきが慕うて來る。幽に虫の音がする。松影は益深くなつて、果は砂の上に零れる月影がちらちらと螢ほどに細く疎らになつた。と見ると、此處にひつそりと鎮まります社がある。大方橋立明神といふのだらう。松影深いその宮に、人影もない、人聲もない、燈明一つ點つてゐない。二人はその松に



橋立明神

倚りかゝつて、良久しく立つた。

「歸るか。」「えゝ。」この言葉の言交されたのは、大分經つてからのことだつた。松影から外に出て歸途に就いて、砂路をぶらりぐくと切戸の渡しに來た。切戸の水はまるで銀河のやうに美しい。汀に立つて向ふを見ると、眞黒い彼岸にたゞ一つ赤い灯が見える。文珠の渡守の小舎の灯である。「おうい、おうい。」渡しを呼ぶ余の聲が震へて銀河をわたる前に、余は月の天橋の端に立つて、暫くその灯を眺めてゐた。(死の蔭に)

四 たのしみは

橘 曙 曉

橘曙曉の井手氏、福井年明治元七年歿

たのしみは政子さま人よけり

はじめてひらけりし時

たのしみはあまむらぐ打楽ひ

かゝらむらぐ物を食ふ時

たのしみは朝おきそで昨日まで

なかり花のさけりし時

たのしみは心にけりし時

あたり静にみりあはく時

たのしみは常にえまねおちのきり

軒とほろぬ樹になき時

たのしみは物後人に静にあひて

いほ今をわたりあふ時
 たのみは柿に思ふてあふ時
 うまひ、いこひやあふ時
 たのみはさる清りくおの中に
 われをひきき人をみは
 たのみは家内いさういつたう
 風なびひびくありはる時
 たのみは三人の子どもすむいと
 木ほくくなれるあふ時
 たのみは人もいさう事もなく
 ころをうけて書をみる時

鈴木 本居宣長、
 勢國の、
 戸時、
 國學者、
 元(四六)年、
 七十二年、
 歿

沼波 瓊音、
 名は武夫、
 古屋市の、
 明治十年、
 佛人、
 等學校、
 教授、
 高

たのみは小豆の飯にほるを
 茶漬てものよりて食ふ時
 たのみは柿のこころの氏ごと
 柿のこころをほくばよ時
 たのみは鈴屋を人の後よ生か
 そのこころを交る思ふ時

自修文

五 私の少年時代

沼波 瓊音

私が高等小學校に在學中の頃であつた。受持の先生が、今度「少年園」といふ少年雑誌が出来たといつて、其の「發刊の辭」を教場で朗讀された。それが非常に名文なのに感服して了つて、私は早速購

中村敬字
名は直、
京市の人、
院議員、
年六十四、
依田學海、
名は百川、
葉縣の人、
學者、
七十、
坪内逍遙、
名は雄藏、
古屋六、
文政博士、
森鷗外、
名は林、
島根縣、
醫學博士、
軍醫總士、
内省、
帝室博物、
院長、
十一、
三年、
大正、
年六十



讀者になつた。それには私の求めるものが凡べてあり、實に注文通りの雑誌であつた。近頃其の合本を取出して見ると、中村敬字・依田學海・坪内逍遙・森鷗外などといふ先生達が、熱心に筆を執つて居られて、今読んで見ても面白

い。そして、寄書欄に、何々中學第何學年藤井乙男などといふ名
の見えるのも、今見ると感が深い。
私の父は雑誌が好きで、能く色々
な雑誌を買つた。併し、其の内に、私
の爲には少年園、自分の爲には風俗
畫報だけを取ることにした。父
は、斯ういふ雑誌はいつ終るといふ



紙表 [民國少]

轟雷閃電挾、
山風急雨俄、
然漲滿空、
願後車、
幸、前車、
落、雲、
學海依田百川

藤井乙男
號は紫影、
庫縣の人、
治元年、
帝國大學、
教授、
京都、
明、
兵

轟雷閃電挾山風急雨
俄然漲滿空願後車
幸前車落雲
中村敬字

依田學海筆蹟

少年は大層盛りがよくて、随分私達がつくに知つて居るやうな事柄がくどく書いてあつた。とにかく、日本之少年以前の少年雑誌には、教へるといふ部分が多くて、機

嫌取の部分が少かつた。昨今の少年雑誌には、ちと機嫌取の部分が多過ぎはしないかと思ふ。

雑誌を讀んだり小説を讀んだりして、いつか文章の善し惡しを云々するやうになつたが、私の通つてゐた漢學塾の先生が、大變私



蘇東坡

を愛して下さつて、私の習ふ書物以外に、大きい人の習ふ書物の講義も、これはあなたも聞いておきなさい。などと

言つて、むづかしい本を當てがはれて、よくお相伴しやうばんに聞かせて貰ふことがあつた。或日、文章軌範ぶんしやくきはんの「後赤壁賦」の講義を、此のお相伴で聞いた。大抵は分らなかつたけれども、又其の時に分つた所もすぐ忘れて了つたけれども、人影じんえい地に在り、仰いで明月を見る。」といふ句だけ、ひどく私を喜ばせた。歩いて居ると、自

文章軌範
宋の謝枋得の
編、謝枋得の
集めたるもの

東坡、東坡は
蘇軾、東坡は
その號、宋の
文章家 (1036-
1101)

分の影法師が地に映る。はてなと思つて上を見ると、もう明月が出てゐた。誠に其の時の光景、東坡とうはの其の時の心持が、其のまゝ、感じられるやうに思はれた。そして、塾から歸る途中に、此の句のこ

とを思つて、考へて見ると、これには飾もない、つまり、其のまゝ、有りの儘に書いてあるだけである。そこに非常な鮮あざやかさがあると思つた。歸つて父に此の話をして、「つまり文章といふものは、有りの儘に書けばよいものだなあ。」と言ふと、父は、「さうさ、しかし、其の有りの儘に書くことがむづかしいのさ。」と言つた。だが、其の時、私には父の此の言葉が分らなかつた。有りの儘を書くのに何のむづかしいことがあらうぞと思つた。

生が「万国名所圖會」が大層よい書物であると言つて、其の一部を見せて下さつた。すると、一人の生徒が小聲で、「又Aさんがねだるだらう。」と言つた。果してAは早速此の書物をねだつて了つた。それを見ると、私も欲しくてたまらなくなり、やはりAと同様、早速之を買つて貰つた。其の時はまだ四巻までしか出来てゐなくつて、あとは出来る毎に本屋から持つて来てくれた。

私が今日まで見た地理書の中に、此の書物ほど面白いと思つたものはない。地理も斯ういふ風に書いてあると、覚えまいと思つても覚えて了ふ。青木嵩山堂から出たものである。序文も本文も一切七五調の韻文で、横濱を解纜して、アメリカに渡り、歐洲に遊



紙表會圖所名國万

韻文
和歌・俳句・新體詩などをいふ、こゝは新體詩

解纜
出帆する
漫遊
方々を巡り歩く

史蹟
歴史の跡

彩象
彩色のある現象



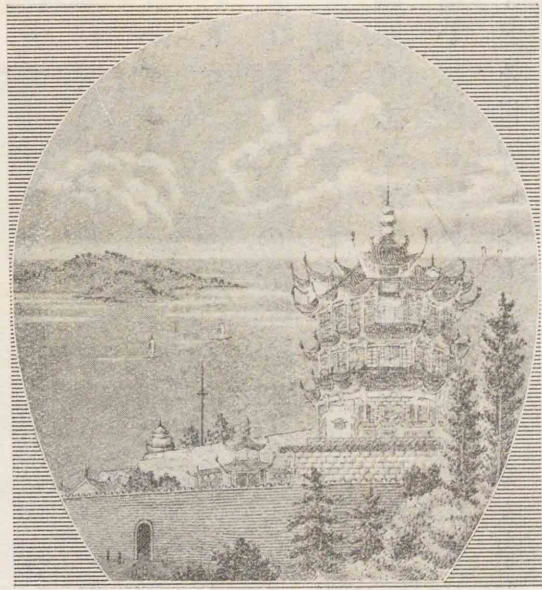
び、それから、アフリカ・濠洲・アジヤ諸國と、ぐるりと世界を漫遊して、日本に歸つて来る旅人の紀行の歌になつて居る。寫眞を欺く程の精巧な銅版畫が各頁の上半にあつて、下半に韻文がある。「船横濱を解纜し、房總の山を後に見て、明けぬ暮れぬと行く程に」といつた調子である。地理といひ條、史蹟に至ると、詳しく其の時の歴史が説いてある。パリでは、芝居を見る所には、舞臺の構造、色々の仕掛のこと音も書いて、劇の筋が舞臺を見て居る通りに書いてある。肉のやうな花弁を持つた巨大な花の咲く國から、志を立てて歐人と肩を並べるに至つた黒人の英雄や、北光といふ、空に現れる最も美しい彩象の下に、氷山の浮んで居る光景や、凡そ世界にありとあらゆる人事と

愛玩
愛してあそぶ

岳陽樓
支那湖南省にある

自然とは、此の書物によつて、其の畫と韻文とによつて、調子よく幼い私の心に刻み付けられた。私は之を愛玩する餘り、火事といふ時には此だけを持出す爲に、それを手提カバンに入れて置いた。

近頃の少年雜誌を讀んで、外國の異景異風の書いてある所を見て、大抵あの万国名所圖會にあつたのを考へると、如何にもあの書物の内容の豊富であつたことに、今更のやうに感服する。名所圖會の最後に出たのは、支那朝鮮の部で、全篇中最も精巧を極め、表紙に岳陽樓の繪があつた。高等學校在學の時、友人が支那



岳陽樓 (萬國名所圖會)

岳陽樓 (吳春筆)



岳陽樓は支那湖南省岳州府城の西門の樓閣で、洞庭湖の勝景を一眸の中に收め、風光が極めて明媚である。

吳春は四條派開祖の畫家である。寛保二年京都に生れた。壯年の頃、攝津國吳服（現大阪府）の里に遊び、酒造家某の家に寓居して新年を迎へたので、遂にその姓松村氏を改めて吳とし、名を春とした。字を伯望といひ、月溪、允伯、存白などと號した。初め大西醉月に學び、後、與謝蕪村を師として南宋文人の畫風を究め、また俳句を學んだ。蕪村の歿後、圓山應舉の筆を好んでその畫風を一變し、遂に一派を成した。文化八年七月歿した。年七十。（西三十一—四七歿）

紛失
まぎれてなく
なる

西條八十
東京市の人、
明治二十五年、
生、詩人、早稲
田大學教授

へ遊びに行く際、此の支那の部を貸してやつたが、それなり紛失（えんじ）して、此の舊い愛玩書は遂に缺本になつて了つた。（凡人に聴け）

六 母と蘆

西條 八十

故郷の母をおもへば、
片岡の蘆もなつかし。

さやくと風の渡れば、
靡き寄るゆふべの穗波、
わが母の眉を忍ばせ。

しめやかに雨ふる夜半は、
そことなき葉ずれの響、
わが母の聲音にまがふ。

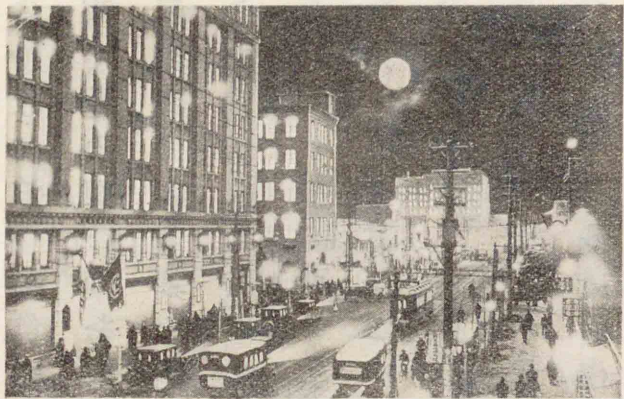
故郷の母をおもへば、
かの青き蘆もなつかし。

少年時代に、私は東京を離れ
て、一年ばかり奈良の古都に近
い田舎で暮らしたことがある。
生れて始めて兩親の傍を離れ



(筆風雅原吉) 蘆

銀座
東京市京橋區



たので、私は明けても暮れても東京の空を眺めては、あの明
るい銀座の街の灯を戀しがつた。

私のゐた家の裏手は小高い丘に
なつて、そこには青い蘆が一面に生
え茂つてゐた。私の室の窓の障子
を明けると、すぐ眼の前にそれが見
えた。晝間は丘の上にコバルト色
の空が覗いてゐた。をりく、白い
雲が流れた。蘆の中では葦切が玉
を切るやうな音を立てた。夕暮に
は、何處からともなく次第に黒く煙

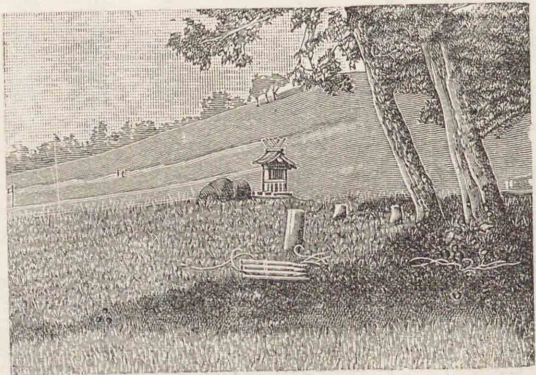
のやうに迫る暮色の中を、冷たい夕風がさやくと渡つて来て、蘆の細い葉を揺がせた。私が一番好きなのは、この夕風に戦ぐ蘆の葉を見てゐることであつた。あちらに黒く、こちらに白く、風に靡いて光りかげる蘆の穂波を見てゐると、それがいろ／＼に人の眉・鼻・口などを描くやうであつた。殊にそれが優しい顔付に見えたので、私は懐かしい母の顔を思ひ出した。私はじつと眼をつぶつて、その蘆の生えた丘の面いつぱいの巨きな白い母の顔を想ひ浮べた。さうして、うすら冷たい風の中で、ひとり、「お母さん。」と懐かしく涙ぐましく叫ぶのであつた。

さうさハナ

西條八十自署

嫩草山
奈良市の東に
ある山

また、その時分、私は毎晩一里の路を歩いて、奈良の町まで英語を習ひに行つた。嫩草山の麓に、ギンポールといふアメリカ人のお婆さんが住んでゐた。もう七十に近い年で、年中眞黒い服を着て、赤く爛れた兎のやうな眼に、大きな眼鏡を掛けてゐた。その人に、夕方の六時から七時まで、英語の讀方と發音を教はり、それから温いおいしい紅茶を御馳走されて歸つて来る時分には、もう田圃の中の夜道には、とつぷり日が暮れてゐて、蛙の聲だけが諸方に寂



山 草 嫩

しく聞えるのであつた。

かうして獨り丘の徑こみちを下つて來る時に、兩側の蘆の葉のさら／＼と戦ぐ音は、恰も彼等が内證で何か囁きあつてゐるやうであつた。時には多數の人がその葉蔭に集つて、何かひそひそ話してゐるのではないかと思はれることがあつた。さうして、その聲の中に、殊更聞覚えのあ



西條 八十

る懐かしい母の聲が聴取れたやうに思へた。

しめやかに小雨の降つてゐる夜などには、取分けさうした感じが深かつた。室へ戻つて、戸を締めて、床に就いてか

和辻哲郎
兵庫縣の人、
明治二十二年、
生、文藝學者、
京都帝國大學
助教授

らも、優しく諄々と諭すやうな母の聲音が、いつまでもしじみと耳元に響いてゐるのであつた。

その頃の母戀しさの心を、私は「母と蘆」といふ題でこゝに歌つたのである。(海邊の墓)

七 天龍川下り

和辻哲郎

いよく舟に乗込むと、舳へさき先に立つて居る船頭が、櫂でばんばん、ばんと舷を敲く。其の音が霧を貫いて、水の上を遠くまで響いて行く。出發といふ波立つた心持が、如何にもふさはしく此の響に現されて居る。此の出發は、天龍川下りの全體の中で、最も印象の深いものの一つであつた。

船頭は前に二人、後に二人居る。四人とも櫂を持つて居る。瀬の處に來ても、二つの櫂で船を操縦する。一二個處瀬を下ると、すぐに天龍峽にはいつた。霧の中に、兩岸に切



和辻哲郎

立つ山が見える。下方は全部巨巖である。其の間を船は一時間約七八哩の速力で下つて行く。河幅は狭いが、水量が多いので、急流の割合に危険な氣はしない。それよりも、寒さと時々舷を越えて來る飛沫とが氣になる。兩岸の巨巖は實に澤山ある、勿體ない。「贅澤だ。」といふ言葉さへ使ひたいぐらゐに。紅葉はもう色が褪

せかゝつて居るが、霧の間に隠見する所は誠に佳い。天龍峽にはいると、皆は「來てよかつた。」といつたが、さういふ景色が絶えず變化しながら何時までも續く。過去つて惜しいと思ふ隙もないぐらゐに後から後から現れて來る。それが一時間も續いたであらう。受けた印象の量から推せば可なり長かつた。三人々はもう天龍川に親みを感じて、嘗て難船があつたといふ茶々淵に來ても、大



して難所らしくは感じなかつた。難所に來る毎に、先頭の船頭はばん、ばんと舷を敲いて警戒する。其のばん、ばんといふ勇しい響を待つやうな氣分にさへなつた。

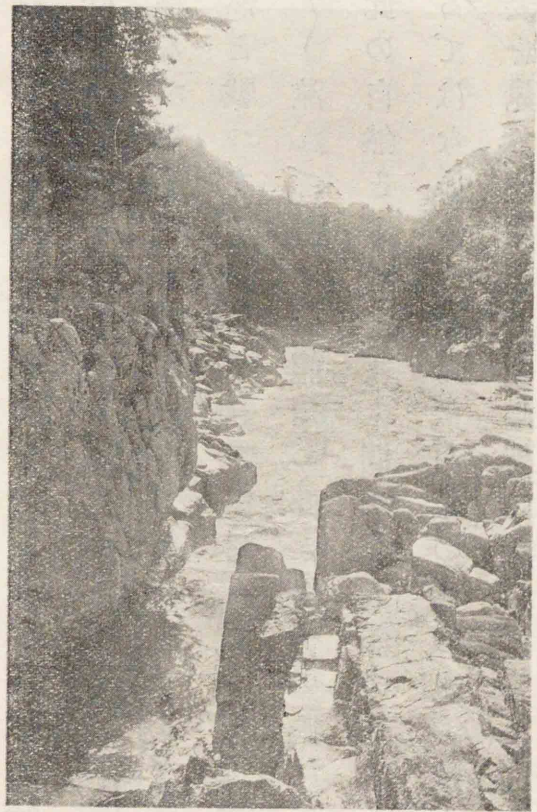
始めて山が開けて村が見えた。橋があつた。其の橋の下流に、櫓の瀧と呼ばれる天龍第一の難處がある。餘り長くもない瀨ではあるが、三丈三尺の落下があるといふ。舟は矢のやうに流れて行つた。舟底はがらくと石に打突かる。飛沫は容赦なく飛込んで來る。併し、船頭は櫓で巧に舟を導いて行く。下の淵に突進んだ時には、舟の舳先はもう岩を避けて居る。此の難處を通つたのは午前七時半頃であつた。

其の後は追々山が開けて、村の見えることが多くなつた。霧も晴れた。畑が見える、竹藪が見える、河原がある。が、追つた山の間を抜けて、穩かな村の景色を見やがてまた追つた山の間へとはいつて行く心持は、自分に取つては天龍峽よりも却つて好かつた。斯ういふ處にも人が住んで居る。さうして激しい自然と戦つて居る。それを眺めて居ると、長く流れて行く天龍川の心が自分の胸にも通つて來る。此の自然と、さうして人間——人間の姿は此處にも見られるではないか。自分は河原の砂の上で遊んで居る子供の姿を見て、涙ぐましい心持になつた。

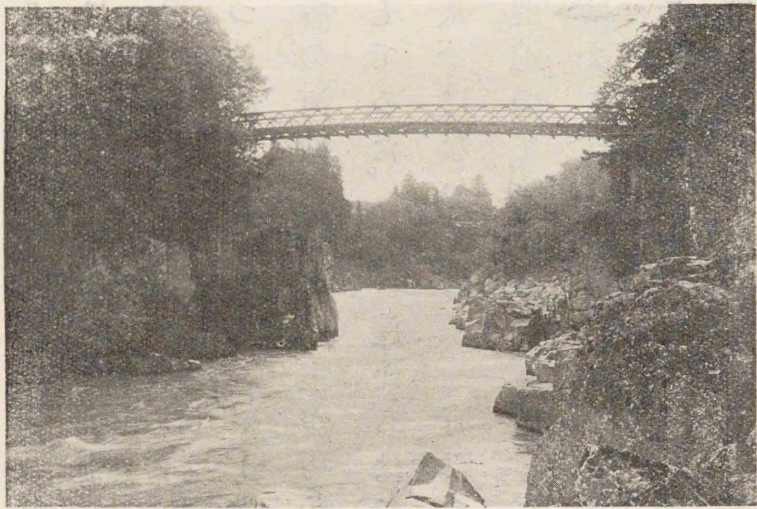
あはれ

和辻哲郎自署

天龍川とし
ては、信濃の國
境を越える前
後の二時間程
の間が、荒つぽ
く、大きく、天龍
の名にふさは
しいものであ
つた。岸に立つ巨巖はもう見られない。併し、烈しい流が
滔々と流れて行き、其の上を、木の葉のやうな舟が、水に揉ま
れながら、まつしぐらに落して行く感じは、前には見られな



(一) 天龍川



(二) 天龍川

いものであつた。此のあたりは山の形もよほど違つて居る。南畫にでもありさうな山が三つ重なつて、突如として目の前に現れたのも此のあたりであつた。
午後一時過、王子製紙會社の工場のある中部まで出ると、よほど気分が違つて來る。此處から山の形もすつかり變つた、地質が別になつて居

るらしい。此の後も迫つた山の間を流れて行くことは同じであるが、併し暫くの間は感じが小さくなる。我々の気分にもよほど倦怠の心持が加はつた。が、頓て二時間も経つと、西川・戸倉といふやうな、妙に感じの深い村に出る。戸倉の河原では、船大工が巧妙な槌の調子を取つて船を修繕してゐた。其の邊からは谷も開けて、如何にも大河らしい気分になつて行く。河原も大きい。其の荒涼の感じが、丁度迫つて来た夕暮と相應じて、天龍川下りの最後の三時間は、また忘れ難い印象を我々に残した。やゝ倦れた氣持で、暮行く山と河とを眺めて居ると、其の倦れた氣持が、周圍の景色の中に生かされて来る。廣い河原の物寂しさは、

千家元磨
島根縣の人、
明治二十一年
生、詩人

丁度我々の心にふさはしい。薄暗くなつて行く水面の何となく味氣ない氣持は、最早我々を乗せて流れて行くのに倦んだやうに見える。船頭もまた倦んだ。併し、それでいい。頓て月が現れた。それも薄曇りの空である。

八 川

千家元磨

川

清い川

あなは波立ち

楽しげに走って行く

笛のやうに歌いながら

曲ったり真直にならたり
 少しも休まず
 泳れて行く清い水よ
 あく樂しげに軽らかに
 みしなを跳上つて浮き物を越えたり
 輪を巻いて踊つたり
 急に輪をほどいて走り出したり
 軽ふやうに樂しく無慮して
 先へへと笛を吹いて走つて行く
 美しい水の精よ
 純潔に守衛に

薄田泣菫
 名は薄介、
 山縣の生人、
 治十年生、
 學者
 文明岡

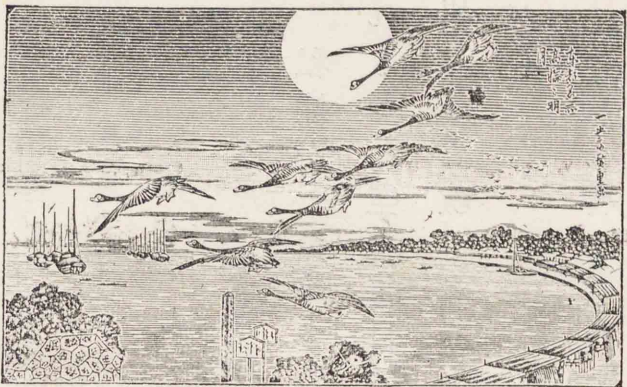
九 渡り鳥

薄田泣菫

軽らかに飛走もなく
 樂しい旅をして行く川よ
 走れ走れ
 足並揃へて (五七)

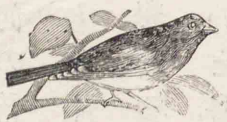
私達が七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を、毎日のやうに雁が渡つた。私達はそれを見掛けると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

「雁よ、棹になれ。棹になつたら、鍵になれ。」



(筆重廣川歌) 鳥り渡

と、其の長い行列が次第に雲の中に
 にじみ込んで了ふまで、聲を喰らし
 て叫んだものだ。併し、何時の間に
 か雁も少くなつて、今では、晝間その
 長い列が空を渡るやうなことは、よ
 くよく人氣の遠い野原か何かでな
 いと、滅多に見られなくなつた。
 渡り鳥の初客と言つたら、さやう
 さ、先づ鴟とでも言つて置かう。秋
 の彼岸が過ぎて、そろ／＼日影が黄色が
 かつて來ようといふ頃、私達は、どうかすると、暖い日の午過ぎ、そこらの木立で、



鶉

鶉の次には鶉が來る。山家の午過ぎ、懶さうな
 蟋蟀の聲も何時の間にか鳴き止んで、枯葉一つ寝
 返りを打つ音までが、はつきりと耳に入る静けさ
 の底に、何處からともなく微かな聲が洩れて來て、

甲の高い、鋭い聲を聞くことがある。「あ
 あ、もう秋だな。」と思はず振返つて見ると、
 矮小な櫟に交つて、づぬけて背のひよろ
 高い榆の木に、鴟が一羽止まつて、黄色な
 夕日を受けて、羽莖が金のやうにきら／＼して居るのが見
 える。私達は、其の瞬間、言はうやうのない強い健かな氣持
 が胸に流れるのを覺える。



鴟

何の音とも分らない。すると、木蔭の^に藪か何處かで、餘念もなくせつせと仕事に精出して居る農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身を反らして、逃げて往つて了ふ。それが鷓だ。鷓といつたら、まるで悲哀でも抱いて居る人のやうに、大抵は連にはぐれて、唯一羽で来る。そして、そこらの小枝に止まるなり、ひよくりくと軽いお辭儀をして、囁くやうな聲で唄ひ出す。



雀 十 四

鷓が来てからもの十日も経たぬ中に、また四十雀が来る。此の鳥は鷓と違つて、十羽も二十羽も群を組んで来る。

蝶蛸(のたまき)の卵の塊

山から里へ移る時などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そして、そこらの木立におろすなり、眩しい程すばしく蝶蛸などを啄き廻しながら、鼠色の背を反らし、柔かみのある胸の圓みを見せて、銀の鈴を振るやうな透徹つた聲で、早口に



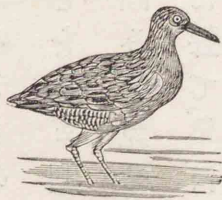
鷓 鷓

しやべり續ける。小雪がちらつく頃になると鷓鷓が来る。

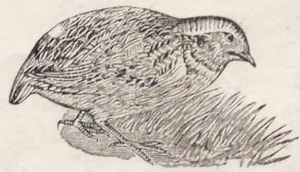
此は鷓と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりとあたりを忍ぶやうにして来る。初冬の午過ぎ、山近い田舎の小家で、爺は炬燵に^{もた}靠れ掛つて、こくりくと轉寢をする。其の側で、婆さんはせつせと糸車を繰つて居る。煤けた障子

に、檐のきに吊した干菜の影が見すばらしく映つて、時折ちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして糸目が切れて、眠さうな紡つむ錘つちの音がぼつたり止むと、こそ〜と掛菜を毫せむる音がするが、老人の耳にはそんな音の聴取れやう筈がない。婆さんは俯いたまゝ糸を紡ぎに掛る。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい〜と小刻みに籬を傳つて、隣から隣へと、狭苦しい物蔭を出たりはいつたりして移つて行く。

鷓鴣と後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびしよび



鷓



鴣

しよと降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までびしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止まつて居るのを見ると、私の國では、此の鳥の鳴聲を解いて、
「一筆啓上仕る。子供泣かすな。火の用心。今度の便りに金十兩、やりたいけれど、一文も御座なく候。」
と言傳へられて居るのを思ひ出す。
後の雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野らにはもうそろ〜、鷓しやうが來、鷓しやうが來て居る。(畿内見物)

一〇 友の消息

一 ロンドンへ

正岡子規

正岡子規
名は常規、
山人の治人、
十五年、
十六年、
三十三

鍊卿・非風
共に子規の俳友

夏目漱石
名は金之助、
東京市の人、
文學者、東京
朝日新聞社
員、大正五年
顔子
名は回、孔子
の門弟

鍊卿死に、非風死に、皆僕より先に死んで了つた。僕は逆も君に再會することは出来ぬと思ふ。万一出来たとしても、其の時には話も出来なくなつて居るであらう。實は生きて居るのが苦しいのだ。

書きたい事は多いが、苦しいから許してくれ給へ。(子規全集)

二 ロンドンから

夏目漱石

僕の下宿の體裁は、前便に申述べた通り、頗る憐れつばいものだが、さういふ心細い處に、三十代の顔子のやうな氣持で能く澄まして居られることだ。君は不審を起すかも知れないが、僕とても御存じの如き俗物である以上、こんな窮屈な活計をして、回や其の樂みを改めず、賢なる

かな。ご譽められようなごは無論思つてゐない。たゞ已むを得ないので、厭々ながら辛抱して居るのだ。ごさへ察して貰へば、それで澤山だ。

僕だつて留學生の學資金體を衣食住の方へ廻せば、いくら物價の高い(倫敦)ロンドンでも、もう少し樂な生活は出来るのだが、自分は又、普通りの書生に立返つたのだ。ごいふ

感じが強く起るの、折角西洋へ來たのだから、ならうことなら一冊でも餘計に専門の書物を買つて歸りたい。ごいふ欲望が僕を高壓的に支配するので、少しの不自由は我慢しなければならぬ。ごいふ氣になるのだと思つてくれ給へ。十年前、大學の寄宿舎で、雪駄の踵のやうな

おまへも山鳥が
がまへへおまへへ
しよか何まへへ
まへへのまへへ
つらまへへ
おまへへ
おまへへ
おまへへ
おまへへ
おまへへ

漱 目 夏

拜啓昨日山鳥が
到着致しました
ので、何處から
来たのかと思つ
たら、大谷正信
といふ札が付い
ておました。何
うも有難う御座
います。私は貴
方の事を忘れて
ゐるのに、貴方
は私の事を考へ
て下さるのみな

堅いピフテキを食つた経験の
ある僕は、若しくなるごあの時
分のここを回想して、一人で一
人を慰めて居る。
併し、冬のひゆうく風が吹
く晩に、ストーヴから烟が逆戻
りをして、室の中が一面真黒に
燦る時や、窓と戸の隙間から其
の寒い風が遠慮なく這入込ん
で来て、股から腰のあたりを堪
らなく冷たくする時や、板張の

魚どのとどろい
ちま子どろい
新しうのどろい
おまへへ
おまへへ
おまへへ
おまへへ
おまへへ
おまへへ
おまへへ
おまへへ

石 筆 蹟

らず、時々魚だ
の鳥だの御菓子
だのを頂戴する
のは勿體ない事
です。尤も忘れ
るといつても記
憶に消されてし
まふ譯ではない
のだから御容赦
を願ひます。一
寸御禮迄 草々
十一月十九日
夏目金之助
大谷正信様

椅子が堅いので、尻が疝氣持見
たやうに痛くなる時や、自分の
着て居る着物が段々變色して
來るにつけて、自分が段々下落
するやうな情ない心持になる
時は、畢竟何の爲にこんな切詰
めた生活をするのだらうご、自
分で自分を疑つて見たくなる
ここもある。
そんな時には、仕方がないか
ら、ステツキでも振廻して、氣を

紛らす爲に、何こいふ目的もないのに、矢纏ごそこいらを散歩する。併し、其の散歩がまた鬱した自分を暗々ごした心持に轉化させてくれるごは限らないから困る。先づ往來へ出て見ると、會ふ者もくゝみんな丈たけが高く、立派な顔ばかりして居る。それで第一に氣が引ける、何ごなく肩身が狭くなる。稀に向ふから人並外れて低い男が來たご思つて、擦違ふ時に念の爲に丈を比較して見ると、先方の方がやつぱり自分より二寸がた高い。それから、今度は變に不愉快な血色をした一寸法師が來たご思ふご、それは自分の影が店先の姿見に映つたのである。僕は醜い自分の姿を自分の正面に見て何遍苦笑したか

分らない。或時は僕ご共に苦笑する自分の影まで見守つてゐた。そして、其の度に、黄色人種ごは如何にも好くつけた名だご感心しないごはなかつた。(下略) (漱石全集)

自修文

一一 世界三都の印象

鶴見 祐輔

鶴見祐輔
群馬縣の人、
明治十八年
生、政治家

〔佛蘭西〕 フランス人は勤勉な國民である。〔英吉利〕 イギリス人も勤勉な國民である。併し、其の勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉そ

れ自身に本質的の差がある譯はないけれども、英佛人の勤勉性の差は、單に外形的・形式的相違だけには止まらぬやうである。それは兩國の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らば、其の國民性は如何に相違して居るだらう。こんなことを考へな

がら、私は一人で能くパリの公園を歩いてゐた。そして、此にアメリカを今一つ加へて、能く三國の國民性を比較して見た。

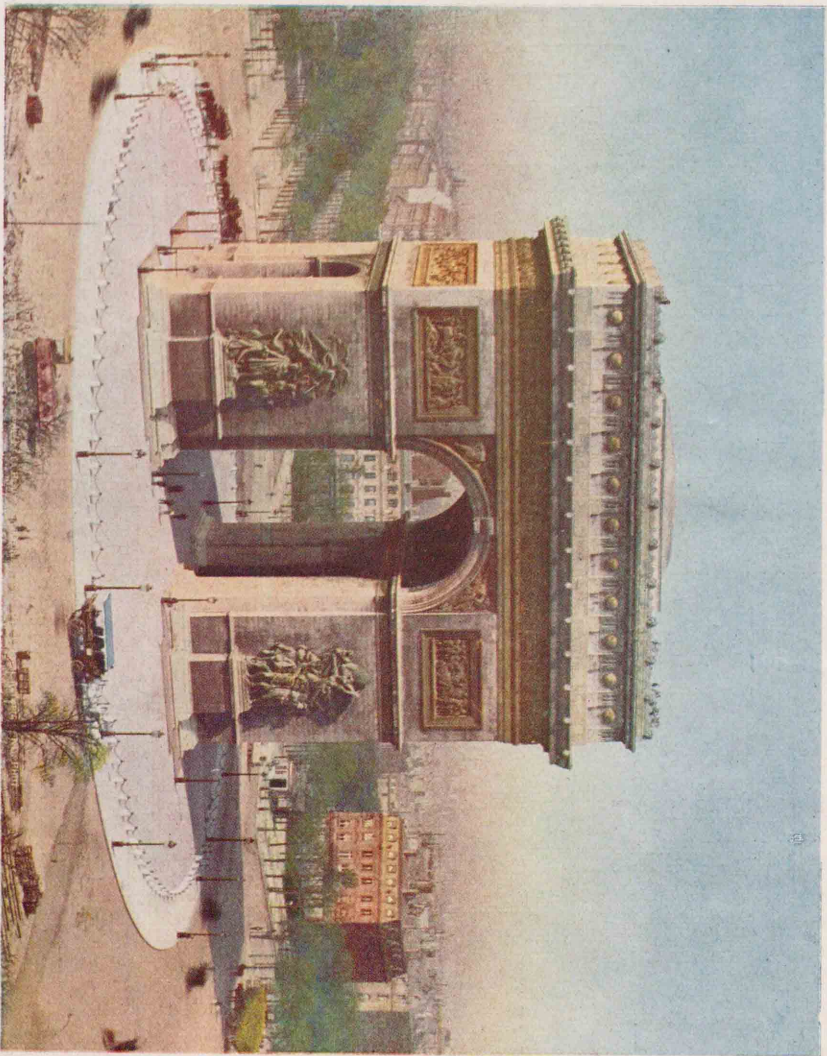
三國の特色は其の大都會に於て著しく眼に着く。それは都會は其の國の國民性を最も鮮に映出して居るからである。多くの



躍動
いきくと躍
りあがる

〔紐音〕
人は、ニューヨークはあまりに歐
洲化して居ると言ふが、併し、ニ
ューヨークに一日居ると、我々はア
メリカの空気が全身に躍動す
るのを意識せずには居られない。
ニューヨークはやはり米國であ

る。そして、ロンドンは英國であり、パリは佛國である。——恰も東京が日本であるやうに。話はまだ英佛人の勤勉性に還る。朝早くパリの街を歩くと、石



門旋凱のリバ

パリ市街に數々ある華麗な凱旋門の中、こゝに掲げたアレクサンドル・トリオンフ、ド・レトアール(Arc de Triomphe de l'Etoile)は、歐洲各地を通じてこの種の建築物中最も顯著なもので、パリ市街放射狀大通十二通路の起點シャンゼリゼー(Champs-Élysées)街頭に巍然として屹立してゐる。全部石造で、西曆一八〇六年、ナポレオン一世がオーストリア及びロシアの大軍を撃破した大功を記念するため、時の大建築家シャルグリンに製圖設計させて建築に着手したが、その中途でナポレオンはセントヘレナ島に歿したので、ルイ・フィリップ(Louis Philippe)がその後を承けて一八三六年に完成した。高さ百六十三呎、幅百四十七呎、厚さ七十三呎で、三個のアーチから成り、武勳拔群の將士の氏名及び戰捷地の地名を刻み、戦死した將卒の靈を祀つてある。

象徴
あらはす

クラーク
書記、事務員

の鋪道の上にはもう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立並んで、新聞賣の小舎と共に、心地よい朝の活動を象徴して居る。黒い質素な着物を着た女達が、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を灑いだりなどして居る。



女賣花のリバ

ロンドンの下町に晝頃行くと、狭い側道の上に、商館や銀行などのクラークかと思える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく忙しげに往來して居る。私は此の群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易をデスクの上でやつて居る此の人

クールヴァン
佛國の女流小説家 (1812-1892)



ロンドン市街

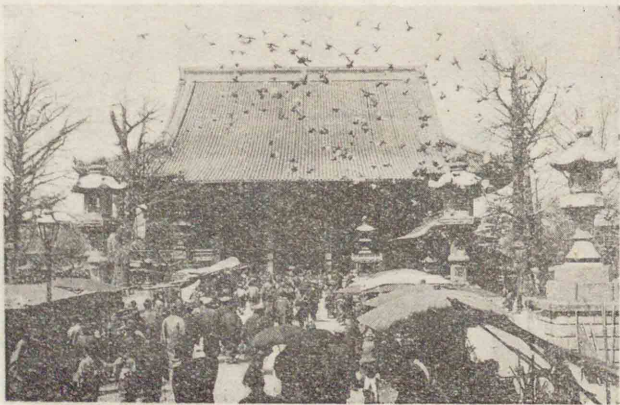
人の日常生活を考へた。そして、フランス人とは種類の違ふ此の人々の勤勉さをも考へた。こんな時には、何時もフランスの小説家クールヴァンConleavinの言葉が腦裡に閃いた。「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に、英國人は蟻のやうに精勵である。」と。パリとロンドンの生活を見て居る内に、此の言葉の深い意味が、一日と自分の頭腦に深く沁みて行つた。晴渡つた初夏の日盛りに、寸刻の隙もなく花から花へ蜜を求めて翔かつて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、如何にも能く佛國人の朝起の心持を現して居るやうに思はれた。そ

健氣
かひなくしい

観音堂
東京市淺草公園内にある金龍山淺草寺の天台宗

して、來るべき冬の支度のため、營々として重い餌を引摺つて行く健氣な蟻の精根が、如何にも能く英國人の勤勉を現して居るやうに思はれた。

それならば、米國人のあのいら／＼した忙しさは何に喩たとへられようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮んで來た。何時行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が我劣らじと押しあひへしあひ、地上の豆を拾つて居る。物音おびやに脅かされて飛立たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へて何時までも餌を拾つて居る。米

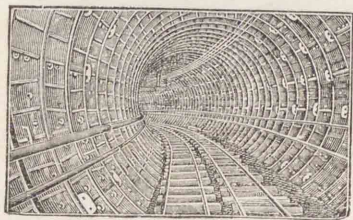


淺草觀音堂の鳩

國人の勤勉は正に此の鳩のやうに
餘裕がないと、私には考へられた。

朝の出勤時間頃に、ニューヨーク
の地下鐵道に乗る人々は、これが此
の世ながらの阿鼻叫喚ではないか
と思はれるやうな雑沓を目撃する
或日、私は汽車の切符を買ひに市内
營業所まで行つた。
大勢の客が群集し
てゐた。係の若い
米國人が、私の行先
と列車とを聴取り、
頓て右手の袖を一

阿鼻叫喚
阿鼻獄に於
ける苦痛の叫
び



地下鐵道内部



ニューヨーク市街

例件

寸捲り上げて、鉛筆持つ其の手を切符の紙の上で左右に五六回激
しく振つた。何をするのかと呆氣に取られて見て居ると、忽ちか
つと手を紙の上に落して、する／＼と切符の文字を眼の廻るやう
な早さで書終へた。只今手を振つたのは、結局手に運轉を付ける
爲だつた。私は噴き出すやうな可笑しさを感じた。何もさう手
に運轉を付けないでも、大して時間に相違もなく字が書けようし、
また運轉を付ける時間だけ無益のやうな氣がした。

其の翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金引上の一覽表を貰
ひに行つた。すると、係の若い英國紳士が、たしか此の机の中に一
枚だけ統計表を入れて置いた筈だ。と言つて、自分の机の抽出を開
けた。私は見るともなく其の抽出の中を覗き込んで見て驚いた。
まあ、何といふ多數の書類だらう、累々と種々な紙片が堆積されて
ゐる。それを件の若い紳士は手を突込んでがさ／＼と搔廻して、

當惑
途方にくれる

「此處にはない。」と言つて、次の抽出、また其の次の抽出を開け、そして、最後の抽出の底から、やつと賃金表を見付け出した。「これは差上げる譯に行かないから、此處で見て下さい。」と言ふから、一度見ただけでは、迎も覚えられませぬね。」と答へると、一寸當惑して、それでは私が寫してあげませう。」と言つて、それを別の白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、傍に居る若い女のタイプストに命じて、一分間内に寫させる所であるが、件の若い紳士は、先づ自分の机の上の大きな吸取紙の上に原本の統計表を置いて、其の上に白紙を當てて書出した。私は一寸面喰らつた形で、此の異様な淨寫法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。そして、今度は其の白紙を左手で持上げて、下の原本を覗いて、次の行の數字を諳記して、また白紙を其の上にべたりと置いて、諳記し

鶴見祐輔

鶴見祐輔自署

抹消
ぬりけす

ただけ書いて、また前のやうに紙を持上げて原本を覗き、また其の上にかさねて書いた。不思議な遣り方だと見て居ると、頓て書終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度は其の紙と原本と二枚持上げて、下敷になつて居る吸取紙の上に裏向に置いて、丁寧にインキを拭取つて、さて私に其の淨書をくれた。ニューヨークから到着したばかりの私は、全く呆氣に取られて此處を出て行つた。そして、幾回となく鉛筆持つ手を振つて運轉を付けて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。

其の春、パリの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣れない私は、誤つて受取人の欄へ自分の住所姓名、差出人の欄へ先方の住所姓名を書いてゐた。之を局の小窓から差出す時、私はふと氣付いて、「おや。」と言ふと、局員の佛國人がつとペンを取つて、受取人といふ字を抹消して差出人と書き、差出人といふ字を抹消して受取人と

書いた。なるほど、これで送票は完成した譯である。而もそれがほんの一瞬間だった。私は全く感服して了つた。そして、ニューヨークの切符賣と、ロンドンの役人と、パリの郵便局員とを頭の中で列べて見た。——鳩と蟻と蜜蜂と。(三都物語)

一二 二千七百メートル

今度の戦争
世界大戦

Archand Beau

アルシャンボーは僕と同じく後備であつたが、今度の戦争に召集されて、僕と同じ第一中隊の第一砲車附になつた。彼は照準手で、僕は一番砲手。彼が照準を合せて、僕が拉繩らじようを引けば、先づ百發百中疑なしだ。

彼は至つて無口な男だ。僕は彼と親しく交つてゐるが

〔獨逸〕
Deutschi

ら、彼の身の上については一向知らなかつた。何でもツの國境に近い處の生れだとは聞いてゐたが、次に話す事件が起るまでは、彼の郷里さへ知らなかつた。

忘れもしない五月の十八日、此の日も僕等は見えない目標を砲撃するのだつた。四門の野砲は、敵の目を避けて、岡の下の低地に砲列を布いた。岡の向ふを見得る者は馬上の中隊長だけで、僕等はたゞ中隊長の命令を今かくと待つてゐた。

此の時、ふと僕はアルシャンボーの顔が青ざめてゐるのを見て、

「おい、君、どうした。寒いか。」

五月
一九一六年

と聞いた。無口な彼は黙つて鼻の頭を空へ向けた。太陽
が出てゐるから寒くはないといふのらしい。

「では、敵が恐いのか。」

と聞くと、彼はぐつと肩をそびやかして見せた。そこへ中
隊長がやつて來た。中隊長はアルシャンボーが此の邊の
者だと氣付いたのだらう、小聲で口早に尋ねた。

「向ふの村を知つてをるか。」

「はい。」

「此處から幾〔米突〕メートルか。」

「二千七百メートル。」

「よし。」

と中隊長は點頭うなづいて、

「これから敵の司令部をやつつけるんだ。」
と言つた。

「司令部をですか、中隊長殿。」

と口數の少い彼は遽しく中隊長を呼びかけて、

「それでは、村一番の家をお撃ちなさい。」

「どの家か。」

「森の右に、塔のある赤煉瓦の家が見えませう。」

中隊長は望遠鏡を覗いて、

「うん、見える、見える。」

「司令部はきつと其の家にあります。大きな部屋が四

つもあつて、地下室には
葡萄酒が澤山あります。

「能く知つてるね。」

アルシャンポーは極小

さな聲で、

「私の宅ですもの。」

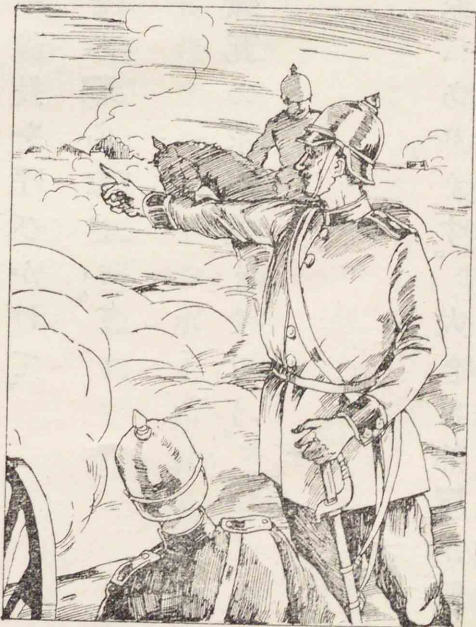
と言つたが、中隊長には聞

えなかつたらしい。

間もなく中隊長が叫んだ。

「榴弾二發、二千七百。」

アルシャンポーは手早く照準を合せた。頓て中隊長が



「撃て。」

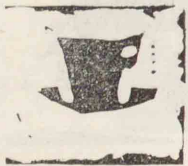
と命じた。アルシャンポーは平常のやうに落着いた、はつきりした聲で、

「よし。」

と叫んだ。

僕の手は顫へた。しかし、思ひきつて強く拉繩を引いた。

川路柳虹
名は誠、東京
市の人、明治
二十一年生、
詩人



一三 コーヒー茶碗 川路柳虹
白い船のやうにかゝやく
硬質の土器、



その上に書かれた唐草は、
朝の光に花に見える。

なみくご盛られた

黒いコーヒー、

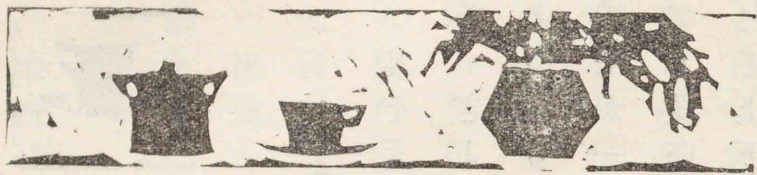
一口すゝる内に、

書けぬ詩のこと、

あらぬ空想の一閃……

しかし、畫家のするやうに

じつと見詰めるコップの面おもてには、



ふと青々とした野がうつる。

ブラジルの原野で、

黒こげになつた百姓が

汗しづくの手に摘むコーヒー。

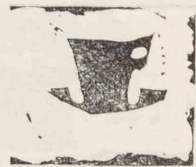
さてまたうつるは、

陶工の竈、熱い火の室内、

ろくろ廻す若人の顔……

げに自分を慰める一杯のコーヒーには、

これを盛る粗末な茶碗には、



汗と惱みと勞苦がまつはる。
生はごこでも喘ぎ、
歡は惱みに培はれる。(豫言)

一四 ペンギン

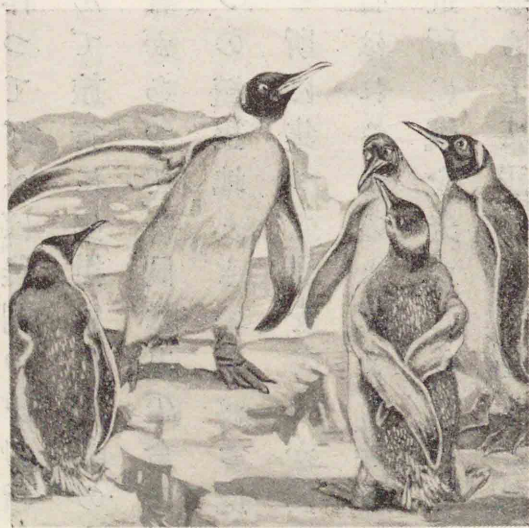
杉村楚人冠

凡そ天下にペンギンほど人を馬鹿にしたものはあるまい。ぎよろりとした目玉を光らして、人間のやうに兩脚でえつちらおつちらと立つて歩く。背中には黒、腹には白の綿毛が一杯に生えて、兩の翼が短く垂れて居る。翼といつても短いから、是で飛ぶ譯には行かぬ。唯時々之をふたふたと上下に叩いて、一つには身體の調子を取り、一つには敵

杉村楚人冠
名は廣太郎、
和歌山市の
人、明治五年
生、東京朝日
新聞社監査役
兼編輯局顧問

と戦ふ時の武器に使ふ。見た所は、さながら、小作りな人が、黒の燕尾服に白のチョッキ、白のズボンで、兩手を振つて歩くやうだ。或種のペンギンは丁度襟の處に黒い線があるので、まるで黒のネクタイを締めて居るやうにも見える。人間に似た所は是ばかりでなく、ペンギンとペンギンとが出會うた時には、互にお辭儀をするやうな體で首を下げる。

春先南極圏へ移つて來て、



ペンギン

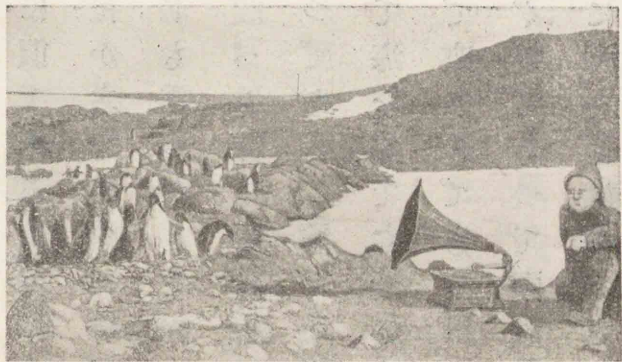
然るべき處へめい／＼巢を作つて了へば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢團體を組んで旅行に出掛ける。其の出掛ける時には、一羽の總指揮官があつて、一同は其の命に従つて連立つて行く。ペンギンの植民地ともいふべき處には、何十万といふ大變な數が一所に集つて巢をくふが、其の間は何等かの社會的制裁が行はれるものと見えて、餘り甚しい喧嘩はしない。中には、近所に親を失つたみなしご鳥が心細げに巢に取殘されて暮らして居るのを見ると、自分の手に引取つて、養育一切の世話を焼くといふやうな義俠心に富んだ奴も居る。

又此の鳥は大變な見え坊で、胸の白い處が一寸でも泥に

ノルデンシヨ
ルド
スウェーデン
の人、南極探
検家 (Nansen)

まみれて汚れて居ると、仲間の鳥どもが、例の人を馬鹿にしたやうな顔を見合せて互に嘲り合ふ。こゝらも頗る人間に似て居る。「善悪ともに人間に似た所が餘り多いので、何だか之を殺すには忍びなかつた。」と、探検家ノルデンシヨNordenskjöldドも言つたことがある。

ペンギンの種類は色々あるが、其の立つて歩くことは一つである。翼が小さくて飛ぶことの出来ぬものが、どうして海を隔てた北の方から渡つて來るかといふと、是は泳いで來るのである。泳ぐのは魚類のやうに身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は唯其の釣合を取るに止まる。泳ぐのに脚を使はぬことは、或人が兩脚に繩を付けて小舟を曳か



シャクルトン
英國の人、南
極探検家 (1874-
1922)

話で、シャクルトンの探検隊が南極に止まつてゐた時、一
行中の或滑稽家が、時々蓄音機を氷の上に持出してやつて

せたら、平氣で泳いで行つたと云ふの
でも知られる。水では泳ぐが、陸では
歩く。所で、敵に追掛けられたとか何
とかで、大急ぎに駆出さうといふ時に
は、忽ち身を倒して腹這になつて、一瀉
千里の勢で、橇そりのやうに氷の上を滑つ
て走る。其の早いことは到底人間業
では追付かぬぐらゐである。

ペンギンの音楽を好むのは有名な

見せた。すると、ペンギンが十羽二十羽と追々に集つて來
て、遠卷に之を取圍んで、感心して聞いてゐたと云ふ。何分
氷雪の外に見る物のない處とて、能く／＼無聊に苦しむも



シ
ャ
ク
ル
ト
ン

のと見えて、何か變つたことが
あると、ペンギンども随分遠方
まで見に行く。大勢で行く時
には、必ず指揮官が一羽ついて、
其の指揮に従つて行く。シャ

クルトンの一行が自動車を動かしたり、冬營の小屋を建
てたりして居るのが、ペンギン社會の大問題となつたと見
えて、如何にも珍しさうに熱心に見に來たといふ。

大勢づれのペンギンが、途中人間か犬かに出會つた時は大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン一同遠くではたと立止まる。先づ一行中の雄が一羽出て來て、恭しく首を下げる。稍伏目になつた儘で、何やら長長と挨拶の言葉を述べる。不幸にして人間には唯カカ、カ、ガア、ガアと聞えるばかりである。挨拶の臺詞セ、ゴが終つて後、始めて首を上げて、今度はずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ畫いて、さてひよつと人の顔を見る。「お分りになりましたか。」といふ風だ。固より以てお分りになるべき筈のものでない。人間はほかんとして立つた儘だ。是に於て、ペンギンは此奴分らぬわいと見て取つて、今一度前の挨拶を長

長と繰返す。それでも分らぬと見たら、今度は他のペンギンどもががや／＼言つて承知しない。そこで、前に挨拶に出た男は大きに面目を失つて引下る。すると、今度は代り合ひまして代り榮ホえもいたしませぬ別の雄鳥が出て來て、又前と同じカ、カ、カ、ガア、ガアをやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長臺詞も面白半分我慢して聞いてやるが、是が犬でもあつたらそれこそ騒だ。シャックルトンの探検記の中にある話だが、或時、ペンギンども右の順序で犬に挨拶をしたが、固より犬に分らう筈はない。そこで、ペンギンが腹を立てて、三羽一時に例のカ、カ、カ、ガア、ガアをやり出した。犬は面喰らつてわん／＼吠える。他

のペンギンはきよとんとして呆れて見て居る。之を見て
ゐた人間は孰れも腹を抱へぬものはなかつたといふ。
最後に斷つておくが、ペンギンは南半球特有の動物であ
つて、最も多く居るのは南極圏内及び其の附近である。北
極のオークといふのが是に似て居るとて、一に之を「北極の
ペンギン」と稱へることがあるが、此はまるで種類が違つて
居る。(へちまのかは)

一五 南洋探検

澁川玄耳

我が國には、もと蜜柑の類がなかつた。何時でも芳ばし
い果物だといふので、「非時香果」と呼ばれ、得難いものとして

澁川玄耳
名は柳次郎、
佐賀縣の大人、
著述家、大正
十五年歿、
五十五年

垂仁天皇
第十二代

非常に珍重された。垂仁天皇の時、南洋の或島に此の美し
い旨い果物があるといふことが聞えたので、天皇は田道間
守といふ航海に長けた人を選んで、南洋の視察を兼ねて、珍
しい果物を取つて来るやうにお命じになつた。此の名譽
ある選抜を蒙つて、間守は大いに喜び、堅固な舟を造り、澤山
の食料を積込み、達者な水夫を募つて、十分の支度を整へた。
北風のそよくと吹く日に帆を揚げると、忽ちに渺茫たる
大洋に乗出した。南へくと走り續けて、十日経ち一月経
つ内に段々貯への飲食物も乏しくなつた。或は雨水を受
けて飲んだり、或は海の魚を捕つて食つたりして饑渴を凌
ぎながら、屈せず撓まず航海を續けた。島影を見ると直ち

に船を寄せて上陸して見るけれども、椰子や芭蕉は茂つて居るが、肝腎の蜜柑の樹は見付からない。仕方がないから、糧食や飲料水などを積込んで船を出し、またあてどもなく大洋を走り廻つて、島といふ島は見付かり次第探検した。かうして幾年か万里の波上に漂うてゐたが、遂に常世の國を發見し、噂に聞いた蜜柑の林を見付けた。枝もたわぶに百千の黄金のやうな實の生つて居る有様は、何と譬へやうもない美しさである。試に食つて見ると、桃にも柿にも比べやうのない芳ばしい匂、旨い味である。長い船路の疲も癒えて、鬱した胸も開き、曇つた心も晴れた。如何なる病も立所に消えて、命も延びるやうな味である。眞に我が天



皇のお求めになる不思議の果物だと感心もし喜びもして、實も葉も附いたのを八枝、實ばかり附いたのを八枝、併せて十六の大きい枝を採り、船に積込んで、早速此の島を離れ、一刻も早く日本に歸つて天皇に献上しようと思つて船を出した。今度は北へくと走つたのだが、何千里とも知れない広い大洋であるから、いくら氣をあせつても、風や浪は思ふまゝにならぬ。歸りにもまた幾年かかゝつて、往復十年で漸く日本に到着した。

いざ天皇の御感に預らうと、喜び勇んで上陸して見ると、哀しいかな、天皇は既にお崩れになつてもはや幾月か経つてゐた。

問守の失望は譬へやうもない。困難が多かつただけに、残念さも多い。十年の長い月日の苦心が水の泡になつたかと思ふと、涙がはら／＼と落ちる。折角採つて來たのであるから、半分は皇后に献じ、残つた葉附の四枝、實ばかりの四枝を天皇の御陵の前に積上げて、其の前にひれ伏して男泣きに泣き、常世の國の果物、あゝ、此の芳ばしい木の實を採つて参りました。田道問守唯今此處に持つて参りました。あゝ、我が君」と、繰返し／＼涙聲を張上げて申上げて、地中

御陵
大和國生駒郡
菅原伏見東陵

の天皇はどうしてお答へ遊ばされよう。問守はとう／＼其のまゝ御陵の前に叫び死にをして了つた。あまりの哀れさに、日本に初めての此の果物を、田道問守の名に因んで、橘と呼ぶことになつたといふ。(古事記断)

一六 義士の討入

村上浪六

昨日より降りに降つたる大雪の何時しか霽れて、仰げば極月十四日の月皎々と高く空を照らし、見渡せば滿地の積雪皚々として一點の塵埃なく、而も曉近き寒風に凍りて、これ幸に脛を没せず、踏むに音あれど、四方は寂寞たる今や無聲の乾坤、其の眞白の中に物凄き一團の黑影、敵の大門を望

村上浪六
名は信、慶應市
の生、小説家
極月
十二月のこ
と、こ、は元
祿十五年

んで肅々と押寄せぬ。

神ならぬ身、表と裏との兩門より、二年越しの遺恨を含みし四十七人、今夜を必死の益荒雄が、我が寝首を狙ひ來るとも知らず、此の大雪を風流の友として、忘年の茶の湯を催し、

浪六筆蹟

文章誤得
世に名に浪
のつらに
のつらに
のつらに
のつらに
のつらに
のつらに

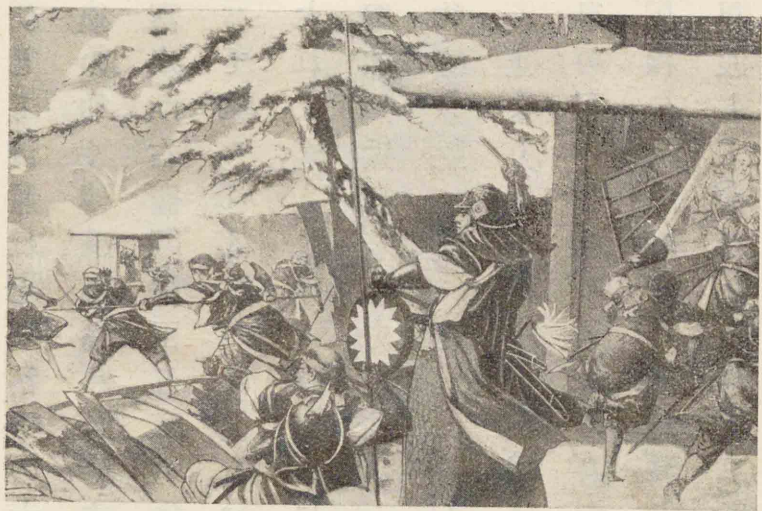
内藏助
大石良雄の通稱

又來る春を契りながら、更は闌け客は散じて、主従こゝに安けき夢の眞最中。

此の寂寞たる乾坤を破りし内藏助の一聲「かゝれ。」の大喝諸共、二挺の竹梯子はや門脇の長屋に掛ると見るや、武者振

ひして待兼ねし一番乗の大高源吾、續いて片岡源五右衛門、猿の如く傳ひしは小野寺幸右衛門、武林唯七、吉田澤右衛門、富森助右衛門、矢田五郎右衛門、何れも落來る雪を頭上に浴びて攀登れば、誰かは後るべき、我もくゝと先を争ふ中に、待たれよ老人。」と呼ぶ聲を耳にも掛けず、今茲八旬に垂んたる堀部彌兵衛、老の力足踏みしめ目を怒らしながら、噎れたる物凄き聲に、「えい、えい。」と叫んで乗越えぬ。

上より外の梯子を引揚げて内へ掛下す間もあらせず、氣早の面々ひらりくゝと身を躍らして飛込めば、原惣右衛門屋根に立ちながら、天地に照添ふ月と雪とに邸内の棟數を見渡して、「あれよ、それよ。」と頻りに指圖せし脚下つるりと踏



義士の討入

迂らし、どつと落ちしが一念の早業、むくりと跳ね起きて、「かゝれ〜。」

物音に夢を破られし門番の足輕三人、寢惚眼に狼狽へ出づるを、忽ち引捕へて高手小手に縛めぬ。

内藏助は表の門を背にしつゝ、心に神明を拜し、眼を四方に配りながら、身動きもせざる雪中の仁王立、兩脇には

浅野内匠頭
名は長矩
上野
吉良義央、通
稱は上野介

旨を承けて指圖役の原惣右衛門と間瀬久大夫。

何れ劣らぬ一味の中にも、豫ねての定め、屋内へ斬入るべき片岡以下の九人は固より虎穴に飛込む勢、生きて再び屋外に出でざる覺悟、月に閃く白刃を拔連れ、槍の穂先を争うて、降積りし雪を白波の如く蹴立てながら、驀地に玄關へ馳向ひ、各、今を一期の大音聲に呼ばはりぬ。「浅野内匠頭の舊臣ども、上野殿の御首級を申受けに参つた。推參、推參。」と言ひも終らず、玄關の戸を蹴破り打破り、わつと喚いて眞先に躍り込みしは小野寺十内の養子幸右衛門、流石に敵も武士なり、心得たりと立出てしを、出合頭の矢聲諸共、横薙ぎに高股を斬つて落して、其のまゝ奥へ行かんとすれば、廣間の床

脇に立並べたる幾張の弓ばらくと一拂ひに弓弦を切つて進みたる當意即妙、後々までも感稱の種となりぬ。西の裏門は大石主税良金、其の後見は吉田忠左衛門と小野寺十内の二人、之に従ふ面々は二十一人。表門に時を合せ氣を合せ、それと言ふや、一黨中の大力の杉野十平次と三村次郎左衛門、満身の勢猛く大槌を振うて、續けざまに三四度、吼ゆるが如き聲諸共打叩けば、扉は破れ門は折れて、どつと屋根より落來る雪崩を浴びながら眞黒に込入りぬ。東西兩門より聲を合せ力を合せ勢を合せて、今や室内に戦の鬨なる時、大石主税左右に向ひ會釋しながらの挨拶、二老の御後見、最早有難く受けました。此の上は初心者ながら主

税これに罷在る。屋外の隅々、其の他の人知れぬ物のあらうも知れぬ折柄、御苦勞ながら一わたり御見廻り下されたい。「や、申されたぞ。さうなうて叶はぬ筈。天晴大夫の子息ぢや。」と、吉田と小野寺の二人各、左右に分れて立去りしが、果して人知れぬ物蔭より、隙を窺ひ味方の不意を覘はんとする敵五人の中、老いたれど早業の吉田忠左



大石良長雄銅像

衛門に目敏く認められ、其の槍に縫はれしもの二人、又小野寺十内の槍に突伏せられて前後に斃れしもの三人。

十内其の槍の穂を雪中に突込み、血糊を拭ひながら見上ぐれば、隣家は土屋主税の屋敷、塀越しに固めし高張提燈を雪に照らして、物々しき警固の體、隣家の情誼に吉良家へ助太刀するかと見れば見らるゝ有様に、折しも來合せし原惣右衛門と片岡源五右衛門諸共、其の塀際に近く寄添ひ、各三人の名



(筆雄良石大介八僕と雄良石大)

を名乗りながらの大音聲、我々は播州赤穂淺野家の舊臣ども、亡主への供物を頂戴致さうとて、今夜これへの推參、他家様に對して毛頭の慮外は仕らぬ。あはれ武門の御情、何卒何卒此のまゝ御見遁しを願ひたい。言葉は低く一應の禮儀を盡せど、若し塀を乗越えて敵に味方をすれば、まだ冷めぬ血刀と血槍の熱を浴びせて、片つ端より打取らんと、の勢暫し其のまゝ見上げしが、高張も動かず、人數の聲もせず、静まり返りて我が屋敷を打守る體。

此の時は既に東西・表裏と屋内・屋外、もはや出るほどの敵を斬靡けて、相手なき刀槍を提げながら、此處ぞと思ふ奥深き一室へ踏込みしが、有明の殘燈薄暗き下に、架けたる刀の

金色のみ光を放ちて、枕も轉びし儘の重ね夜具は蛻の殻、手を差込めば夢を破りし證跡、まだ微温あり。それといふ言下に忽ち四方へ駈散りて、あらゆる室内の隅々まで捜し廻りしが、天に翔りしか、地に潜りしか、更に影なく音もなく、何時しか東雲の横雲より白みかゝりて、夜は將に近く明けなんとす。

村上浪六自署

儲は今までの苦心も水の泡かと、一



同少し弱れる折柄、老功の督勵はつと一時に氣を取直して、又もや四方八方へ手を分け足を飛ばせしが、臺所口に打續く長屋尻の間に一棟の物置小屋、外より鑰を懸けて人のあるべき筈なしと、今まで通りすがらに見遁せしも、尋ねあぐ

みし耳を欬てて忍び寄れば、なんとやら微に物の動く氣配。五六人其の前に駈集りて戸を蹴破れば、奥より抛り出す炭俵。儲はと打拂ふ間もあらせず飛來る一人を、三村次郎左衛門矢聲諸共に袈裟がけに斬る。續いて飛出る者共を四方より斬斃せば、最後に絶體絶命の一人、小刀を抜いて現れし眞正面より、間十次郎の槍玉ぐさと刺せば、武林唯七また肩先の一刀、視れば一個の老體なり。白無垢の小袖を血に染めて、まだ死に切らぬ氣息奄々。「やあ、白無垢の小袖」「たゞ者ではないぞ。」「聞及ぶ年配。」「若しやそれでは。」「用意の小笛は音迄えて、曉の空に響き渡りぬ。何れも我を忘れて駈來る一黨、前後左右より立寄りて首筋を捉へ、其の額を

打守れども、老の皺のみ、それかと思ふ創痕もなし。更に引出して小袖を脱がすれば、あら嬉しや、紛ふかたなき先君が無念の御太刀筋、消えもやらず二年越しありくと残りぬ。



村上 浪六

大願成就、今更胸に迫りて言葉も出でず。せき來る涙に兩眼を曇らせ、中には嬉しさの餘り大地に打伏し、聲を揚げて雪中に號哭する者さへあり。

表の門脇に縛め置きし番人の足輕を連來りて、いよく其の人と定まるや、内藏助は靜に進み、一刀すらりと引抜きぬ。「淺野内匠頭の舊臣四十七人、吉良上野介殿御首級を申

受ける。」凜たる一言、まだ息絶えぬ上野介が喉元ずばと止め、一刀刺貫き、其のまゝ振返りて、「間十次郎首級を揚げい。」それとも知らぬ槍先の功名、身に餘る面目、武士の冥加に叶ひし間十次郎、御免なりました。「と一黨に會釋しながら、打落せし首を改めて内藏助の實檢に供ふれば、取圍みし四十餘人の同志、思はず一聲に勝鬨を擧げぬ。

小野寺・片岡・原の三人各、又姓名を名乗りて、堀越しの土屋家に挨拶、「只今これに本望相達し、上野介殿御首級を申受けて引取る所、先刻より不慮の騷動を御耳に入れ、何とも恐れ入る次第、一同の者に代りて御挨拶申上げます。」一黨更に兩分して、其の一半は邸内を押廻し、長屋々々の戸を槍の

鑄に打叩きながら、もはや引揚ぐるぞ。出合ふ者は出合へ。との聲々、されど現在の主を打たれて首を縮むる腰拔ども、息を殺して空屋の如し。又一半は室内に入りて、間毎々に燃残る蠟燭を吹消し、爐火鉢に悉く水を注ぎ入れ、若しや後に味方の取落せし見苦しき品やあると一々見廻りぬ。明行く空に響き渡る銅鑼の音、一黨何れも溢るゝばかりの笑顔に駈集り、人數を改め姓名を呼上げし後、豫ねての退口、整々として裏門より立出づれば、旭日東天に昇りて、満目の雪紅に匂ひぬ。(四十七士)

自修文

一七 報恩美談

一 感謝の火鉢

井上哲次郎

大倉喜八郎男が、或日、故中村敬宇先生をわざ／＼向島の別邸に招いて饗應されたことがある。その時、男は先生を上座に据ゑて、



「私は先生のお書きになつた西國立志編を読んで、感奮措くところを知らず、決然志を立てましたのが基で、漸く今日あるやうになりました。私の今日あるのは、偏に先生の西國立志編のお蔭です。今日お招きしましたのは、そ

の先生の御恩に對して、心ばかりの感謝をしたためです。どうか御ゆつくりお寛ぎになつて下さいませ」と述べられた。先生はこの日始めて男の立志の動機を知られたのである。

井上哲次郎、福岡縣の人、安政二年生、文學博士、東京帝國大學名譽教授、大正十五年三月の作である、大倉喜八郎、新潟縣の人、天保八年生、男爵、實業家、饗應もてなす

歡待
よるこんでも
てなす
客來欲有
リテスラント
言、但使飲
レ言、但使飲
醇酒、此中有
妙用、勝千口
万手、讀史
敬宇正直

客來欲有言但使飲醇
酒此中有妙用勝千口
萬手 讀史
敬宇正直

中村敬宇筆蹟

大倉男は中村先生を心ゆ
くばかり歡待された後、ついで
は感謝の記念として先生
に差上げたものがありま
す。と言つて、特に先生の爲に
拵へた白檀の火鉢を贈られ

た。先生は非常に喜び、感謝の心の籠つた火鉢を俥に乗せて、嬉し
げに歸途に就かれた。

かういふ喜は、著述をした經驗

のある者でなければ分らぬ氣持かも知れぬけれ

ども、中村先生も餘程嬉しかつたと見えて、早速その喜を詩に作ら

れた。その詩は先生の詩集に收められてあり、またこの事實も附

記してある。

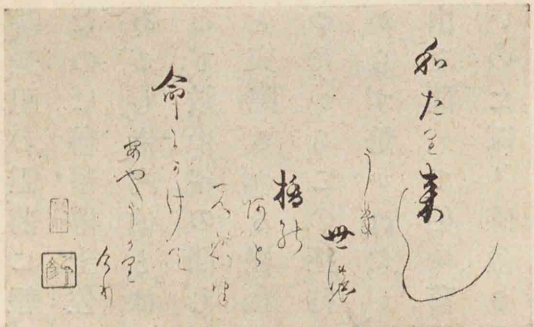
井上哲次郎

井上哲次郎自署

欣快
よるこぼしく
心地のよいこ
と

わたり來しう
き世の橋のあ
と見れば命に
かけてあやふ
かりけり

横山健堂
名は達三、山
口縣の人、文
治五年生、明
尊家
寺内正毅
山口縣の人、
元帥陸軍大
將伯爵、大
正八年歿、六
十八



大倉喜八郎筆蹟

私を喜ぶ

らう。

その後、私は或會合の席上で大倉男に會
つたので、この詩集中の記事と詩の話をし
たところ、男も感慨に堪へぬもののやうに
非常に喜んで居られた。

二 感謝の報告祭 横山 健堂

寺内正毅伯が内閣總理大臣になられた

佐藤進
千葉縣の人、
順天堂病院
長、大正十年
歿、年七十七

西南戦争
明治十年

時、先祖の靈前に報告祭を行はれた。その日主賓として招待されたのは醫學博士佐藤進男であつた。佐藤男は軍醫總監の肩書はあるし、寺内伯とは知らない間ではないが、年賀狀を交換するぐらゐで、數十年の間しみじみと交際される機會はなかつたから、この招待には少からず驚かれたが、その理由を聞いて、伯の舊情の厚いのに深く感激された。



寺内正毅銅像

西南戦争の際、當時大尉であつた寺内伯は、敵丸に右腕を貫通され、大阪病院に後送された。多くの醫師が診察した結果、治療が手後れになつてゐるから、右腕は切斷するより外に方法がないといふことであつた。この時、伯

腐蝕
くさる

爾來
それから

懸腕
懸腕直筆のこ
と腕を下に
つけず筆を
眞直に持つて
字を書くこと

驚歎
驚きほめる

を診察した一人である佐藤男は、當時歐洲外科醫界の最新療法により、腐蝕した骨の部分だけ切抜き、肉と肉とて繋いで腕を保存する方法を斷行することを主張し、自ら刀を執つて手術された。それが美事に成功した。爾來寺内伯は左手敬禮の特典を得てゐられたが、とにかく軍籍に在ることが出来たのは、その右腕が保存されたからである。右腕には力はないが、少々の用事は辨ずることが出来た。懸腕は出来ないが、腕を膝に靠せて、飯を食ふぐらゐの事や、小さい文字を書くぐらゐの事は出来た。その後、伯が洋行された際、右腕を歐洲の名醫に見せられた所、新進の日本國に、最早こんな最新外科術を行ふ醫者があるか、と驚歎したさうである。それは歐洲でも當時は尊い技術であり、また佐藤男の伎倆も頗る立派なものであつたのである。その時、伯は非常に喜んで、その事を佐藤男に通知して、感謝の意を表された。爾來三十餘年、伯と男と

交渉
わいりあひ

微賤
いやしい

卓抜
すぐれた

の間には込入つた交渉はなかつたが、伯は次第に榮達して、終に大宰相となり、男は既に隠居して居られた。

しかし、伯は男の恩を忘れられなかつたものと思はれる。伯が



佐藤進

長州の足輕奇兵隊の軍樂手といふ微賤な地位から身を起して大宰相となられるに至つたのは、軍人として續いて奉公することが出来たればこそである。そして、それが出来たのは、佐藤男の卓抜な外科手術によつて右腕を保存することが出来たからである。若しあの時右腕を失はれたら、伯は廢兵となられなければならなかつたのである。伯は痛切にこの事を考へて、佐藤男の手術に感謝の意を表し、男を以て報告祭の主賓とされたのである。

斜ならず
一方ならず

毛頭
すこし

芳賀矢一
福井市の人、
慶應三年生、
國文學者、
國文學士、
院學博士、
和大學長、
六十二年
昭和元年

佐藤男はこの招待を一代の光榮として斜ならず感喜されたのであつた。男は、あれは自分が軍醫、外科醫としての當然の職務を行つただけで、毛頭も伯に恩を施したのではない。自分が當時の日本にはまだ誰も知らなかつた新技術を知つてゐたのが、偶然に伯の幸となつたのに過ぎない。然るに、その偶然から來た幸運に就いて、自分をかうまで優待された伯の心持は、實に感激に堪へない。」と語られた。

一八 新年

芳賀矢一

曆の改まるとともに人は一年づつ年を取るが、實際はその度毎に生れ變つて若くなるのである。新しい年を迎へるのには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發す

るから、事業に對する勇氣も生ずる。過去を顧みると、人の行爲には缺點もあり失策もある。それを何時までもくよくよと思つてゐては、前途の發展を望むことが出来ぬ。過



芳賀矢一

去は水に流して、將來に光明を求め、それが渡世の良法である。そして、この好機は即ち年の改まる日である。

我が國には、昔から大祓といふ儀式によつて、過去のあらゆる罪を一掃し、汚れた心を打棄てて復活する風習がある。これは六月と十二月との二度に行はれた。即ち我が國民は、一年に二回づつ心身とも

に新になつて復活したのである。この大祓の式は今日でも行はれてゐる。就中十二月は年の新になる前であるから、この復活の儀式が盛大に且嚴格に行はれる。

そこで、我等は新年を迎へる用意として、身分相應に、出来るだけ一切の物を新にし清くして、形の上にもこの復活の義を現すことを務めるのである。春秋に富む青年は勿

一 新年の習俗

芳賀矢一自署

論、還暦に入り古稀に達する老人でも、その生れ變る心持には別に異なるところがない。

正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて今日に至つたものである。注連繩や、交讓木や、白木の三方や、土器や、昔

ながらの祖先以來の風習を繼承して、毎年繰返して行くところに妙味がある。即ち年々生れ變ると同時に、年々昔を憶ひ出して行くのである。祖先から傳はつた掛物を掛けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

我が國民の宗家と仰がれたまふ皇室に於ては、我等が一家に於て家の祖先を祀ると同様に、新年には四方拜を行はせられ、また元始祭を擧げさせら



江戸時代の正月

春の事はじめに古事記を
開きかけて先
にみるも天
のめつる地
のみはじめて
の春のめつる
とよみはじめて
の春のめつる
の春のめつる

春のめつる
の春のめつる
の春のめつる
の春のめつる
の春のめつる
の春のめつる
の春のめつる
の春のめつる
の春のめつる
の春のめつる

橘曙覽筆蹟

れ、内外臣僚を召させたまうて、拜謁を許し、御宴を賜ひなどしたまふ。これを思ふと、我等は今の世ながら、直ちに太古建國の昔を憶ひ起さないではあらぬ。我等は、橘曙覽の、春にあけてまづ見る書も天地の

始の時と讀みいづるかな。

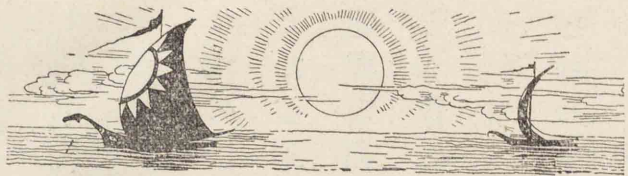
といふ歌を早くから深く感心してゐた。これは、あの元朝や神代のことも思はるゝ。といふ荒木田守武の句と同一の思想であつて、日本人の心

荒木田守武
伊勢内宮の祠
官連歌師
天文十八年
三月十七日

には、元旦と神代とは離れないものである。

一九 お日様の船出 與謝野晶子

與謝野晶子
與謝野寛の
妻、市の人、
明治十一年、
生、歌人



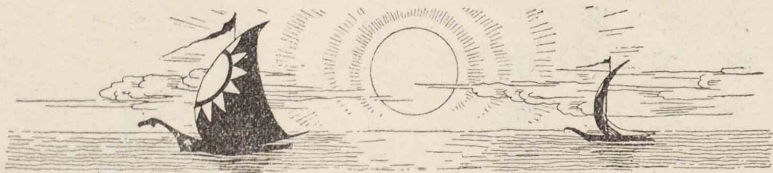
お日様、お日様、
若いお日様、
今日はあなたの鹿島立ち。

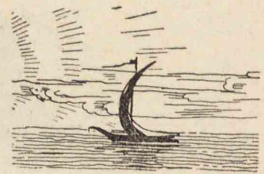
正月元日、瑠璃色の
海になびいた霞幕、
その紫をすこ分けて、
金のお船に、玉の櫂

東の空に帆を揚げる。
めでたや、めでたや、
おめでたや。

お日様、お日様、
若いお日様、
今日はあなたの鹿島立ち。

金のお船に積餘る
熱い光は世を温め、
真紅の帆から洩る風は、





長閑かな春を地に満たし、
そして行手は花盛り。
めでたや、めでたや、
おめでたや。(日本童謡選集)

二〇 試作

一 ストローヴ

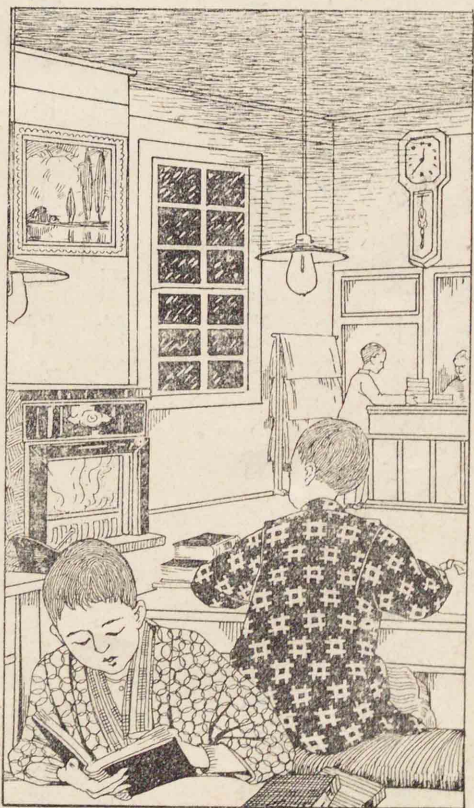
毎朝起きると、すぐに硝子戸越しに見える眞白な霜。太陽でさへ冷されるのだらうか、金色の光には紅味がなくなつて、地上を斜に照らし出す。火！それは冬には何といふ魅力を持つてゐるだらう。火のない室は冷たく寂しい。

火は人を引付け、體を温めるばかりでなく、心をも暖にして、周囲の物象と親しませる。起きて出て火がないと、本を手にしても心が落着かない。清少納言が「すさまじきもの」の一つに、「火おこさぬ炭櫃火桶」を數へてゐるのは、動かぬところだ。さうだ、教室のストーヴへ行かう！かうして下宿住まひの者は誰もストーヴに引付けられて行く。

□

今炭を入れたストーヴが、焔の渦巻く音を立てて盛に燃えてゐる。段々とストーヴが下の方から赤くなつて來る。上の方の空氣が陽炎を作る。ストーヴを繞つて級友の談笑が始まる。

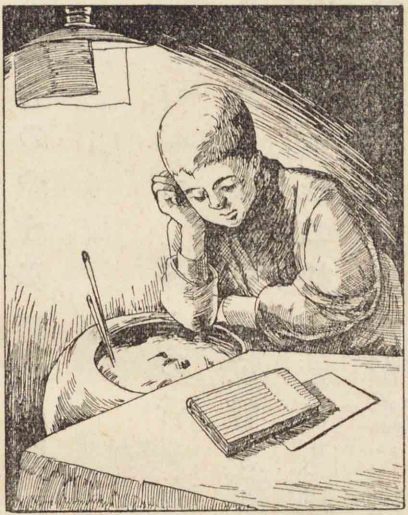
□
 昨夜は騒々しい夜だった。僕は夕飯後一時間ぐらゐして圖書館へ行つた。靜かな室に柱時計が撓まず時を刻んでゐる。突然サアといふ音がする。霰が降るのだ。窓硝子に當つて躍つてゐる。地を打つ音、大波のやうな風の音、室内の目は一樣に窓の方へ向く。寒氣さむけがぞつとする。ストーヴは燃えてゐる。こんな時のスト



ーヴは何といふ頼もしいものだらう。見ただけで體が暖になつて来る。心もすぐ暖まる。自分は讀書しながら、何だか籠城でもしてゐるやうな、そして、ストーヴが信賴すべき王者のやうな一種心強い氣がして来るのだつた。(中上生)

二 ペンの音

寒さうな小兒の泣聲が止んで、冬の夜はまた元の寂寞に返つた。庭の松の枝にも風の音は絶えた。と、隣室から誰かの運ぶペンの音が微に洩れて来る。續いては切れ、切れては續いて、何事かを訴へるやうにも聞え、また恨を語るやうにも聞える。私の机の上には、金文字入の教科書が淡い



電燈の光に冷たく輝いて居る。ペンの音に耳を傾けながら、じつと其の金文字の輝きを見詰めて居ると、それが夢のやうにまた幻のやうに自分を引きつけて行く。音の流は絶え絶えに響く。あゝ、冬の夜のペンの音、なんといいふ寂しい響だらう。

火鉢の炭火には白い灰がふはふは動いて居る。故郷の冬の有様が身を顫はせるやうに頭の中に浮んで來た。雞に啄かれた霜除けの中の石竹、葉の落ちた柿の木の枝、それらの荒果てた庭を眺めて居る

白髪しらがの父。種々の思出は冬の小川のやうに淋しい咽びをなして流れて出る。爪先からぞくぞくと冷たさを感じられて、更けゆくまゝに冬の氣が膚に迫るのを覺える。ペンの音はまだ止まうともしない。(楠本生)

三 きたかぜ荒れて

一

きたかぜ荒れて白雪は
野山を深くとざせども、
雪のしたには下萌えて、
千草八千草はるを待つ。



なほこの上
に憂きこと
のな積
ほこの上
に積
れかし
の力た
る身の
さん(熊
山の作
られて
る)傳へ

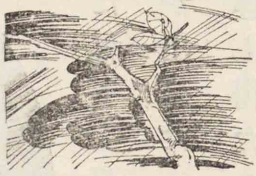


二
黒雲そらにみなぎりて、
篠突く雨の降らば降れ
雲の上にはにこやかに、
太陽あるをおもはずや。

三

なほこの上に憂き事の
積れといひし人もあり。
艱難われにせまるとも、
なごか眉根を我寄せん。

四



まなびの力身に添へて、
希望のひかり輝やかせ。
遂に消えざる雪はなく、
遂に霽れざる雨はなし。

島崎藤村
名は春樹、長
野縣の人、
治五年生、
學者

二一 文章雑話

一 根 氣

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川で能く泳いだことがある。全
く水には経験のなかつた私も、漸く岸を離れることが出来
るやうになり、次第に中流までも進み得るやうになつて、一
夏も水泳場に通ふ中には、向ふの河岸まで泳ぎ越すことが

出來た。更に又一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃には能くも分らなかつた瀬の早い遅いも分つて來たし、淡水と潮水との雜り合つたあの川の中の冷たい處と温かい處とも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の様子を泳ぎながらに見ることも出来るやうになつた。板子なしには溺れる外はなかつた私も、二夏の末には、優に隅田川を横切つて往復することが出來た。私は、普通の泳ぎ手が行ける處までは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことは



島崎藤村

大人も怒りを
忘れないうち
は子供の友と
なることが出
來ない
藤村

大人も念ふを忘れない
うちを子供し友とある
こと出さずない

藤村

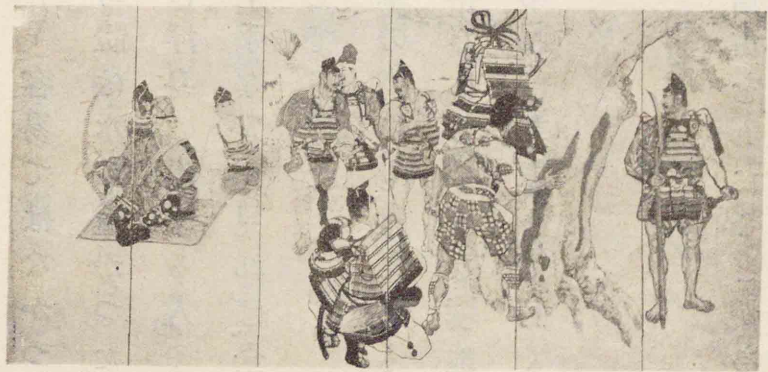
なか／＼容易ではなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人や拔手の上手な人を見れば、全く感歎して了つた。

あるに相違ない。そして、根氣さへあれば、其處まで行くことは決して困難でないに相違ない。

二 先づ自己を正せ

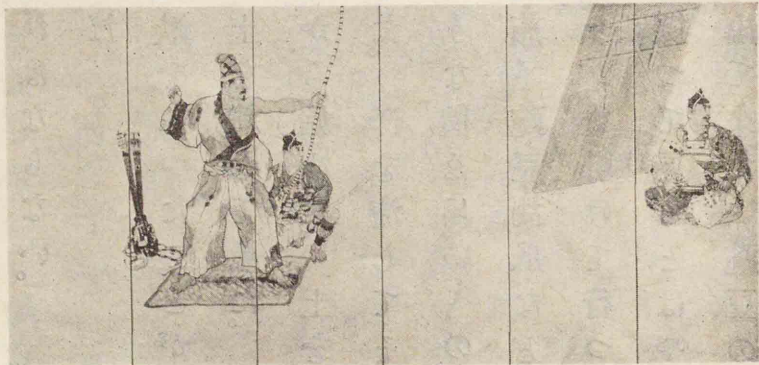
信州の小諸こもろにゐた時分、私は弓の稽古をしたことがある。

誰でも最初の中は的に向つて矢を
當てることばかりを心掛ける。「唯
當りさへすればいゝ。」斯う思ふ時
代には、幸に一本の矢が的を貫くこ
とはあつても、他の矢は思ひも寄ら
ぬ場所へ飛んで行く。射手の心に
頼む所もなく、矢の曲直を辨別する
力もなく、さうして、幸に當つた矢は
徒に煩い高慢な「熟練」を思はせるば
かりだ。小諸に住む舊士族の一人
で、弓術に心得のある老人が私達



勢 弓

矢場に來た。其の老人は先づ「姿勢」
を正すことを私達に教へてくれた。
それからの私達の矢は、たとひ的を
貫くことが出来ないやうな場合で
も、一手揃ひで同じ場所に行くやう
になつた。
是は文章の道にも當嵌めて見る
ことが出来る。唯好い文章ばかり
作らうと思つて焦心することは、決
して目的を達する道でない。眞に
好い文章を作らうと思へば、どうし



(筆 耕 廣 尾 四)

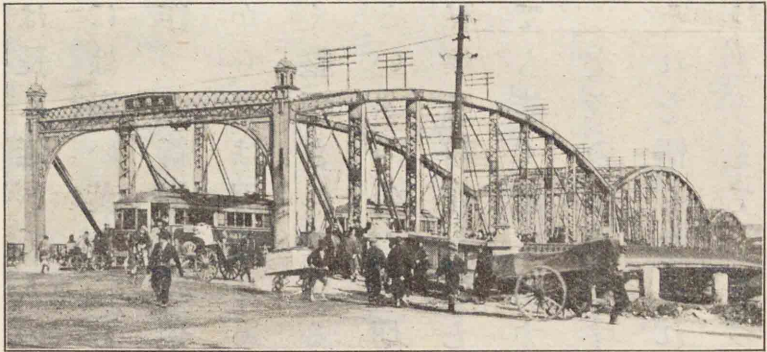
でも先づ「自己」から正してかゝらなければならぬ。

三 試みることは悟ることだ

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書の傍、よく鋤を擔いで行つて、土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を砕いた。小石を擇分けた。地均しをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。其の畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、サクを掛けて行つた。馬鈴薯の花の盛りの頃、試に土の中を探つて見ると、はや丸い薯が幾つもくゞ其の根本の方から出て來た。豌豆の蔓

は長く延びて、人の丈よりも高く手に絡みついた。畠の中には、嫩い莢を摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手で能く整理されて居る畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私は或耕作を通して非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でも能く思ひ出すことが出来る。

文章の手本とすべきものが何程我々の周圍にあつても、それを悟らなければ仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。「試みる」



橋 國 兩

といふことは「悟る」といふことの第一歩だ。

四 簡素の美

浅草の新片町に住んでゐた頃、家が浅草橋や兩國橋に近いので、私はあの隅田川の界限を漕廻つたことがある。最初の中は無暗と手足を動かして、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し手許へ引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。が、次第々々に手足を動かすことが少

くて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押すことが出来るやうになつた。「向ふから大きな磚^{てん}がやつて來たぞ、あいつに一つ衝突しないやうに。」斯う思つて漕いで行く樂みなどもそれから起つて來た。其の後、船頭のする所を見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには「力の省略」があり「簡素の美」があつた。

文章の道に於ても、無暗と筆を弄することが決して自己の眞の「表白」とはならない。眞に好い文章には眞に好い「結晶」の力がある。

五 音 讀

すぐれた人の書いた好い文章は、それを默讀翫味するば

かりでなく、時には心ゆくばかり聲を揚げて讀んで見たい。我々はあまりに黙讀に慣れすぎて居る。文章を音讀することは愛がなくては叶はぬことだ。(飯倉だより)

二二 藤樹先生

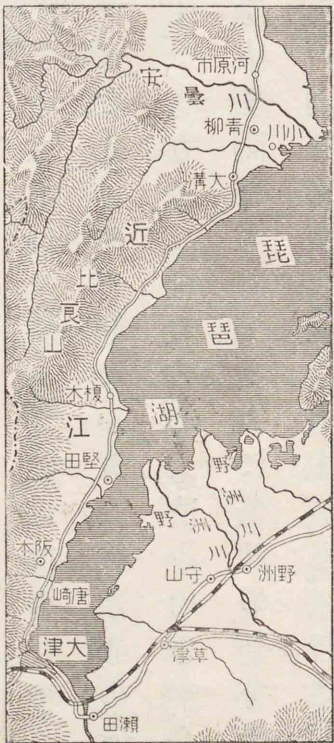
橋 南 谿

熊澤先生は藤樹先生の門人なり。此の人の藤樹先生に従はれし初を尋ぬるに、其の頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊る。馬方、河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚の取忘れたるにこ

橋南谿 宮川春暉 伊勢の人、江
戸時代の後、文
化二年(一四五
三)歿、年五十三
熊澤先生 通稱は次郎
八、號は香山、
岡山藩に仕へ
た、江戶時代
前期の儒者、三
元禄四年(一六
五七)歿、年七十三
藤樹先生 中、江與右衛
門、名は原、近
江國の人、江
戸時代の前期の
儒者、慶安元
年(一六五八)歿、
年四十一

そ。」と思へば、其のま
ま榎木に走り行き
て、飛脚の宿れる宿
に到り、對面して委
しく尋ね問ふに、相
違なければ、其の金を取出して返しけり。

飛脚は死したる者の蘇りたる心地して、喜の餘り、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、若し此の二百兩なくば、己が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に到らん。されば、その恩なかく、言葉の言盡すべきにあらねども、先づ當座の御禮までに贈り奉る。」と、涙を流して喜



ぶ。馬方大いに驚きし顔色にて、そなたの金をそなたに取
納め給ふに、何の禮ごと言ふことあるべき。」とて、手にだに取
らず。



中江藤樹

色々にこしらへ言へども、更に受
けずして歸らんとする故、已むこと
を得ず、十兩と減じ、五兩となし、三兩
となし、段々減じて終には金二歩と
なし、せめて此ばかりは我が心の悦
なれば受け給ふべし。さなくては、我が心も濟み申さず、今
宵も寐ね難し。」と、理を盡し詞を盡して言ふにぞ、此の金を受
け申すほどならば、二百兩をも留め置き申すべし。斯く返

格物致知

中江藤樹筆蹟

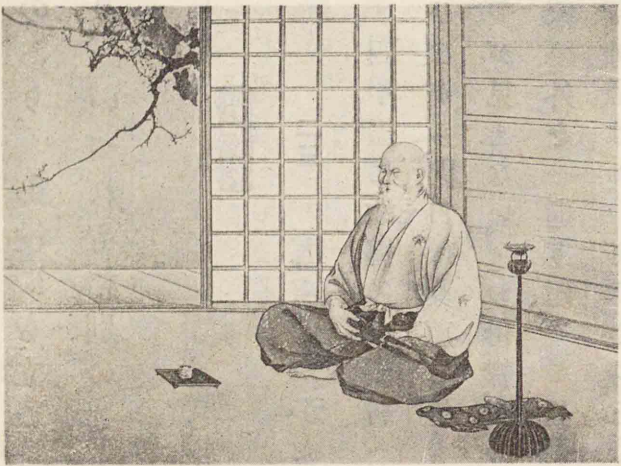
百文にて酒を買ひて其の人に
振舞ひ、我も酔ふほどに飲みて
歸らんとす。

ても、そこは如何なる人にておはする。」と問ふに、「名ある者に
あらず、又何一つ知れる者にあらず。たゞ我が在所の近所
に小川村といふ處あり。此の村に與右衛門といふ人おは

して、夜毎に講釋といふことをす。某も折節行きて聞き侍りしに、『親には孝を盡すべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず。』などといふこと常に語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり。と言捨てて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さても此度は辛き命生き延びて、各方にも對面することとなりぬ。とて、ありし次第を委しく語りけり。折節、其の家の裏に、熊澤次郎八田舎より上りゐて、學問修業最中なりしが、此の物語を聞きて、其の人こそ誠の儒といふものなれ。とて、其の翌日

備前
こゝは岡山藩
主池田侯をさす



熊澤只管

江州小川村を尋ねて隨從を願はれしに、人に教へ申すべき程の學徳なし。とて、更に隨從を許し給はず。熊澤只管に願ひて、二日が間藤樹の門に佇みて歸らず。藤樹の老母之を氣の毒がり、とにかくに先づ内に入れ申せよ。とありし故、辭み難くて内に入れ、終に師弟の契約をせられけりとぞ。

其の後、藤樹を備前より招き給ひしに、其の身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふも

のあり。御役にも立つべきものなり。」とて、熊澤を出されけり。いづれも格別のことなり。(東遊記)

自修文

二三 雪のわかれ

四年振に故郷の小川村へ立歸つた藤太郎は、「お母様、お母様。」と言ひながら、門口に莫塵も笠も投捨てて家の内に入つて見たが、母の姿が見えない。「お母様、只今戻りました、お母様、只今戻りました。」と家の外を一廻り廻つて見たが、更に姿も見えず答もない。さては、お母様はおいででなさらないのか、家でも違つたのか。先年大洲へ立つ時には、確に此の家にお住ひ遊ばしてゐたのに、自分が伊豫國に行つて居る中に、餘所へお引越になつたのか、それとも御病氣に

大洲
伊豫國

背戸
うらぐち

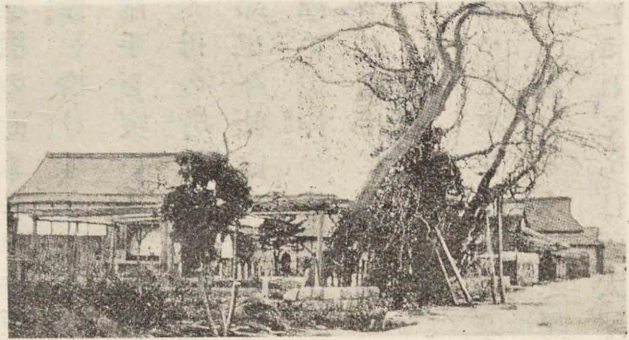
誑かす
たます

井筒
井戸の地上の
たは石を四角
へたは圓く構

でもおなりになつたのではないのかと、子供心の胸の中は混乱して、「お母様、お母様。」と頻りに呼びながら、裏口から背戸へ出て見れば、垣根の向ふに車井戸を汲上げる音がする。近寄つて見れば、母は襷を掛けて、今しも釣瓶の繩を手繰つて居るので、思はず雪の中に両手を突いて、「お母様。」と呼ぶ。

母の芳枝は吃驚して、遠く離れた伊豫の大洲へ行つて居る藤太郎が、今此處に來る譯はない。日頃自分が藤太郎を慕ふゆる、狐か狸かが倅の姿に化けをつて、此の母を誑かすに相違ないと、繩を握つた両手に力を籠めて、屹と此方を睨んだ時、また「お母様。」と呼ぶ聲がする。さては狐でも狸でもない、やはり人間、我が子の藤太郎が歸つて來たのかと母は驚き、急ぎ釣瓶を手繰上げて井筒の角に置く。溢れる水は寒風に忽ち氷柱となる。

「これ、そちは藤太郎か。」お母様、御機嫌よう。「なに、藤太郎。これ、



藤樹書院

どうしてそなたは歸つて來た。「はい、お母様が此のほどお祖父様の許へお手紙を下され、其のお手紙の中に、胼靴ひづらかぎで御難儀を遊ばすとございましたので、私は良いいお薬を戴いたいて、之をお母様に進すすめたさに、伊豫國から遙々歸りましてございます。」なに、此の母がお祖父様に送つた手紙の中に、胼靴で難儀致すとあつたのを見て、そなたは薬を持つて來たといふのか。「はい。」母は心の中では、我が子の志、あら可愛やと抱なめたいとは思つたが、いや待て暫し、先年國を出す時に、學問を修業して立派な人間にならない中は、必ず歸つて來てはならぬ。」と言聞かせてあることゆゑ、

不憫ふびんではあるが追返さねばなるまいと、辛い思おもつて胸に問ひ胸に答へる。「これ、藤太郎。」はい。「そなたが四年前お祖父様と伊豫へ行く時、此の母が何と申聞けました。「立派に成人して歸つて來れば、目出たく母子おやこの對面もするが、若し途中で歸れば、必ず母子の縁を切る。」と言うたのを忘れましたか。「いゝえ、それは忘れは致しません。お母様が胼靴で御難儀とのことに、良いい薬を差上げたばかりにこれへ持つて參りました。」して、お祖父様が「其のお薬を持つて歸れ。」とでも仰せられて參つたのか。「いゝえ、さうではございません。お手紙を拜見して、早くお癒なほし申したいと存じて參りました。」それなら、そなたはお祖父様もお祖母様も御存じない間に來たのだな。「はい。」して、其のお薬といふのは何れから。「中田長閑齋とおつしやる方から、施しのお薬を戴いて來ました。これをお塗ぬり遊ばせば、どんな胼靴でも切疵きずでもすぐに癒ると申します。

山中
伊豫國

それ故、一日も早く此のお薬をお上げ申したいと、一所懸命に参りました。「此方へ参る道中の入費は。」それはお母様、何も持たずに出ましたが、山中といふ山で迷つて居る中、遠藤源左衛門といふお方様の奥様に助けられました……」
「あゝ有難い。『渡る世間に鬼はない。』と申す諺の通り、さて〜我が子の難儀をお救ひ下さつた遠藤様御夫婦のお志。必ず其のお方様の御恩を忘れてはなりませんぞ。」「はい。さうして、お母様、昨晩は朽木谷の峠で、雪の中で氣を失ひましたのを、御老僧様のお助を得まして……」
「あの、雪の中に倒れたのを……」

母は言葉を改めて、たとひ、どんな難儀をして参らうとも、母が豫ねての言葉に背き、文武の道の修業も成らず、半途で歸つたを、なた、すぐ大洲へ戻れば宜し、さもなければ親でもない子でもない。一人て伊豫から來られるぐらゐなら、一人て戻られぬこともあるま

朽木谷
近江國

い。是からすぐ戻れ。此のまゝ、すぐ伊豫へ戻るかどうぢや。「すぐ是から戻ります。どうぞ家へ歸つたことはお許し下さいまし。」「許してあげる。すぐに戻れ。」「はい、戻ります。其の代り折角持つて参つた此のお薬、どうぞお塗け遊ばして。」「それほど心を籠めて持つて歸つた薬、それは喜んで申受ける。」「有難う存じます。」「藤太郎は母に薬を渡して、懐かしさうに母の顔を見る。母はわざと怖い顔をして、家にはいつて、簞笥の抽斗から金を取出し、さあ、此の金をそなたに遣はすによつて、之を路用に伊豫のお祖父様、お祖母様の許へお戻りなさい。」「いえ、お金は入りません。遠藤様から戴いたお金がまだ澤山ありますから。どうぞ此のお金で下女をお雇ひになつて、お母様、此の寒い中だけなりといくらかお樂をして下さい。」「いや、其の志は忝いが、其のやうに母のことは心配せずとも宜い。母が薬の代として此の金を進ぜる。さあ早く〜」
腹の

中では、今宵一夜は手許に留め、温にして休ませてやりたいとは思ふものの、さうすれば却つて母子の情に搦まれて、戻す勇氣も戻る元氣も失せようと、きつぱり思ひ切つた母の言葉に、是非なく藤太郎はお金を戴く。「ではお母様、御機嫌よう。修業致して立派になつて、復お目通りを願ひます。」

痛い足をやつと踏みしめて出て行かうとすると、草鞋が曲つて、紐が解けて居る。「あ、これ、藤太郎、そなたの草鞋が曲つて居る。それでは直に破れる。よう直して參れ。」はい。「と草鞋の紐を結び直さうとしたが、指の先が冷えきつて、まるで湯煮た鰻のやうになつてゐて、自由に結べない。さすがの母も見兼ねて、此の母が結んであげませう。」と言つて、お縁に腰を掛けさせて、曲つた草鞋を直して居ると、屈んで居る母の領へぼたりと落ちるものがある。顔を上げて見ると、藤太郎は兩眼からせき來る涙を臉に留め

體
ありさま

かねて、はらくと落して居る。此の體を見て、母は錐で領元を揉まれるやうな感じがして、あ、不憫や。」とは思つたが、頓て草鞋の紐を締直して、さあ、これで宜しいから早くお出で。」と言つて、門口まで手を取つて連出す。藤太郎は莫塵を着、笠を冠り、途中で杖に拾つた木の枝をついて、「お母様、御機嫌よう。」途中よう氣をつけて行きなさい。「はい。」と力なげに答へて立出でる。



母は折しも降來る雪の中へ一足二足と段々踏出す我が子の後姿を見送る。藤太郎は彼是五六間進んだが、足を留めて後を振返

る。母は戸をぴしやりと閉める。其の途端、藤太郎は引返して、戸の外から「お母様、今一度お顔を……今一度お目に懸りたうございます。お母様、お母様、遠い伊豫の大洲から遙々参りました藤太郎……是から又伊豫へ戻りますから、今一度……お母様、どうぞお顔をお見せ下さい。」と呼ぶ。「お母様」と呼ばれる度毎に、内に居る母は胸に釘打たれる心地。袖を啣へて何とも言はず、戸尻をしつかり押へて居る。「お母様、お母様」とん／＼と戸を敲く。果はわつと泣倒れる。戸を開けて飛出して介抱してやりたいとは思ふものの、こゝが辛抱のしどころと、じつと忪へる。其の内、泣倒れた藤太郎は、どうしても再び會はぬ母の決心を悟り、辛うじて起直り、杖に縋つてすご／＼と出て行く。

亡き夫
中江吉次

や、あつて戸を開けて見れば、もう我が子の姿は見えなくなつて居る。流石氣丈の母も座敷に這上り、佛壇なる亡き夫の位牌に

向ひ、只今悴の藤太郎が立歸りました。が、思ひ切つて伊豫のお祖父様の許へ戻し遣はしました。どうか途中藤太郎の身に過のないやうお守り下さい。眞に切ない思を忪へて追返しました胸の中お察しを願ひます。」と、在すが如く且告げ且頼む。

此方は藤太郎、痛い足を踏みしめ、小川村から大津へ出て、それから京都に入り、大阪、兵庫に來て、便船を求めて大洲へ立歸りました時は、お祖父様、お祖母様は既に方々に人を出して藤太郎を尋ねたが、其の行方が一切分らないので、近江國へ使者を立てようとしてゐた所、そこへ藤太郎が無事に歸つて來たのを見て、夢かと思つたり打喜び、仔細を聞けば、十歳の子供が近江國まで母を尋ねて参つたとのこと。此の孝子の一念には、流石の老夫婦も感心して、あ、此の母にして此の子あり、思ひきつて離し遣はした母親の心中、よくも再び戻つて來た藤太郎の決心、此の上は一層精を盡して文

教育講談
故早川貞水著

尾崎喜八
東京市の人、
明治二十五年
生、詩人

丹澤
神奈川県西
北部にある山
秩父山塊
埼玉縣の西部
にある山塊

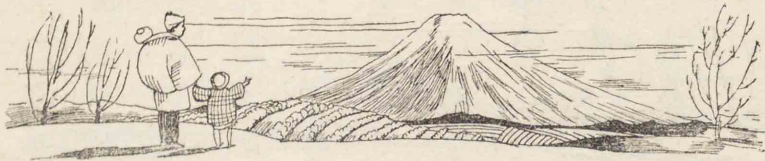


武の道を仕込まねばならぬ。」と語り合つた。近江聖人中江藤樹先生幼時の逸話これを以て終とします。(教育講談に據る)

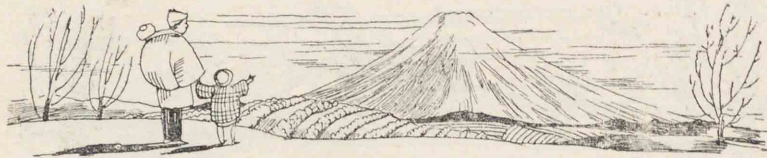
二四 私のかはゆい白頭巾

尾崎喜八

私のかはゆい白頭巾、
白い毛糸の頭巾かぶつた私の幼いまな娘は、
今朝もまた赤い朝日を顔に浴び、
初霜に縮れた大根畑のみごりを越えて、
冬の地平を限る箱根・丹澤・秩父山塊、
それより遠い



それより高い富士山の、
雪に光つて卓然たるを見に行きます。
私の腕は、
彼女を包む藤色のジャケットの下で、
小さな心臓が躍つてゐるのを感じます。
私の眼は、
空間の雫よりも清らかな彼女の瞳が、
物みな錯落たる冬の平野のはて、
あの玲瓏として氣高いものに、
誠實に打たれてゐるのを見て取ります。



朝の西風の強い野中で、
 まあるく縮まつてしかも最初の感動を経験
 してゐる小さな肉身、神祕な魂、
 その父親の腕に抱かれて聲をも立てぬ一つ
 の精神、
 私のかはゆい白頭巾よ！
 武藏野うまれ、
 西も東も見さかひ付かぬ此の小娘を、
 私は正しく育てて人生に送らう！

矢野龍溪
 名は文雄、大
 分縣の人、嘉
 永三年生、文
 章家

二五 豊太閤

矢野龍溪

古人に景仰すべき者甚だ多し。豊太閤の如き其の一人
 なり。事業の宏壯、施設の警拔、氣宇の宏濶、度量の廣大、千古
 絶倫と云ふべし。公の事業、施設は後世或は得て學ぶべし。
 其の氣宇、度量に至りては殆ど望むべからず。公の人とな
 りを想ふ毎に襟懷の爽然たるを覺ゆ。

我が國に未曾有なる應仁以來百年の大亂を定め、武威は
 異域をも震動せしめ、天下懾服して、又一人の頭首を擡げ得
 る者なき尊貴の地位に在る人として、左の一事あるを想ふ
 時は、眼のあたり其の人を見るが如き心地す。

或時、太閤馬に乗りて烏丸通を參内す。新在家の下女

烏丸
 京都の北方、
 御所に通する
 南北の通の一

應仁
 後土御門天皇
 の年號(三三
 一三三六)

佐久間が云
云 天正十一年賤
嶽の戦に、
佐久間盛政が
中川清秀を破
つた時のこと



豊 臣 秀 吉

四五人、赤前垂を掛けたるが、出でて見物す。太閤馬上より見て宣ふ、「只今我内裏にて能をすべし。皆々見物に來よ。」又事を爲すに臨んで奇警迅速、一點も容態ぶらざるは左の一事にて知らる。

「閣茶の湯を催し居給ふ所に、佐久間が中川を討ちし注進來る。太閤其の座より裳を捲り、えいや、御馬廻衆は追々に追付き奉る。」而して盛装の行列には唐冠を冠り鬚を附くるなど、其の

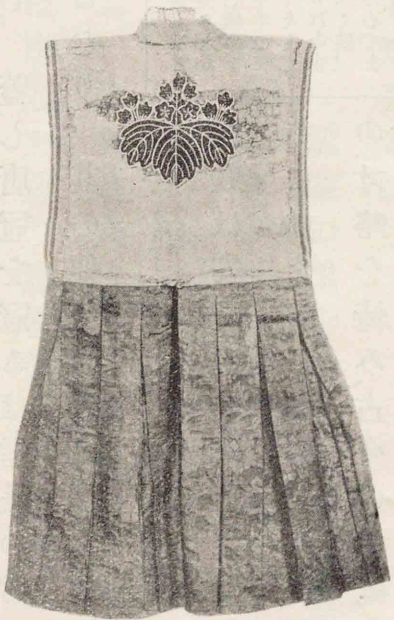
聚樂
京都内野の聚樂の第
伏見
京都伏見の桃山の第
安土
天正四年に信長が近江國蒲生郡安土村に築いた安土城

容態ぶれる有様又面白し。蓋し唐冠を冠るは信長の常になしたる風體を真似たるなり。其の他公の奢は多く信長を手本とせり。聚樂・伏見の宏壯は安土の結構を真似たるに始まる。公の失は、自家の才略を恃み、古今の治亂を究めずして、戒愼の足らざるに在り。公は百年の大亂を定め、人民の塗炭の苦を救はんが爲に、此の世に出現せし

豊 臣 秀 吉 筆 蹟

はやくとまつらまこし候事まんとくにて候、そもじよりれい申候べく候、さだめてまつらこをひるひ候て、はやくと申こし候間すなはちこのなは、ひるひこと可申候、した

又公の明察にして苛ならざるは、左の一事にて知らる。
 「山城の内山里と云ふ處を、梅松と云ふ坊主に預けらる。
 新に松を植ゑて程もなきに、松茸生ぜりとて献上す。太
 閤笑ひ給ひて、『我が威光誠にさもあらん。』と宣ふ。それよ
 り數度献ず。實は他處より求めて献じたるなり。太閤
 左右の者に、『最早松茸
 献ずることは止めさ
 せよ。生え過ぐるぞ。』
 と宣ふ。」
 公が大體に敏くして、
 物事に瑣細ならざる事



織羽陣の吉秀臣豊

柴田勝家 通稱は修理 亮、信長の臣、
 天正十一年三 月、越前國北 庄、自封して、
 佐々陸奥守、後 肥後國に降り、
 五十六年、天正 四年、歿。年五 十四。
 蒲生氏、信長 氏に、臣つた、
 四年、(三十五 文) 歿。年四十。

は、左の一事に見ゆ。

「太閤、柴田勝家を征する時、城に火の手の上るを見て、其
 のまゝ越中に赴き、佐々陸奥守を征し給ふ。勝家が首は
 見ざれども、さやうの事は何と
 も思はざるなり。」
 公の無造作なるは左の如し。
 「太閤氏郷を會津百万石に封
 じ給ひつ。其の後、氏郷の出仕
 を一番書きてくれよ。硯紙を持來れ。」と宣ふ。」
 公も儉徳の心なきに非ざること左の如し。



矢野龍溪

高野山 紀伊國伊都郡頂上眞言宗大本山金剛峯寺あり

北條氏直 高野山の子、後氏政に放たれた、十八年歿、年三十三

諏訪峠 信濃國諏訪郡

「太閤高野山へ參詣の時、割粥を進めよ。」と宣ふ。暫くありて料理人調へ參らす。太閤喜びて、「高野山は白なき處なり。我が割粥を食はん事を知りて持來る。料理人才覺の至りなり。」と宣ふ。實は俄に多人數にて俎の上にて刻めるなり。後に話の序に申上げければ、大いに怒つて、「無くば無しと言ひて、常の粥を出さんに何の仔細かあらん。我が力には、一粒づつ削りて食ふとも心のまなれども、さやうの奢をばせぬものなり。」と宣ふ。公が寛仁なること左の如し。

矢野龍溪

矢野龍溪自署

「北條氏直方より、諏訪峠より東、八万石の領地は氏直が

領ならでは協はぬ處なり。こを渡されなば上洛せん。」と言ふ。太閤「與へん。」と宣ふ。諸臣同ぜず。太閤宣ふ、「八万石の地を吝しみ、諸卒を遠國の合戦に勞せんこと不便なり。之を與へて後、上洛せずして異變あらば、其の時軍を發せん。」と。

公が無頓着なること左の如し。

「太閤伏見在城の時、鐵砲四五十ばかり放つ音す。座に在る人皆々怪しむ。太閤「大名ども鳥など打ちに出でて歸るさに、玉藥を打抜くならん。」とて嘲笑つておはす。見に遣はしければ果して然り。此の者共聞きて、少し氣味悪しく思ひて、一兩日過ぎて御前に出づ。太閤笑つて宣

ふ、『此の頃の遊面白かりしか。』とて、少しも心に掛け給はぬ體なり。」

右の諸節は、老人雜話・武功雜記・備前老人物語の諸書より抄出せり。此等は公の時を去ること遠からざる頃の人々の手に成りしものなり。(舌人評論)

二六 八道の山

大町 桂月

大町桂月
名は芳衛、
知縣の大人、
正文高
年十五
七章家、
十四年歿

八道の山よいざさらお

年比な、とせ戈執りて

踏荒したる日の本此

益荒雄を今歸るなり

釜山の浦比秋ふけて

空もしぐる、夕間暮

波路遙かに帆を揚げて

汝といまやああるなり

知遇の恩に身を捨て、

四百餘州をわが駒の

蹄蹴んと勇みしも

覺めて儂き夢るまや

わさを知りには太閤の

世になき後を誰が為に

千里のそとに戈執りて

異境北山にいくさせん

恥を忍びてふるさとに

歸るも後に死なんため

主君の家北行末を

思へど重き命なり

あはれ太閤世を去りて

世嗣の主もいとけなし

石田小西北小人ばら

かならず事を誤らん

わが幼時より育まれ

恵よあみよ豊臣の

石田
名は三成
小西
名は行長

家を護りて死なん身の

永くを住まじ世の中に

あとに見捨つる益荒雄北

亡き魂若しも知るあらど

三途の川や六道の

辻にいばらく我を待て

是を限りの見をさめに

今ひとたびと見返さど

波音をごく雨荒れて

壁山て霧よおぼろなり

八道北山よいざきらば

國の譽とたゝめひて

花と散里に日の本此

男の子此骨を護まよや (黄菊白菊)

二七 安宅

坪内逍遙

春の初
文治三年(二八)
二月のこと
安宅
加賀國にあ
る、たゞし當
時の關の址は
今海中に陥つ
てゐるといふ

時しも頃は春の初、風まだ寒き北國路を、いたはしや義經は、兄頼朝の疑を受け、奥州さして落ちて行く。主從僅に十二人、辨慶を先達さきだちに、山伏姿に身を窶し、日數程經て加賀國安宅あぢの港に着きにけり。
義「いかに辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特に關を設けて、山伏を嚴しく取調ぶる由、いかにすべきぞ。」

辨「これはゆゑしき御大事なり。きつとこれにて御工夫あるべし。」

人々「いや、何程のことかあらん、たゞ打破つて御通りあるべし。」

辨「いや、打破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、なるべく穩かなる手段を取りたし。」

義「然らば辨慶、ともかくも其方の工夫に任せん。宜しく計らひくれよ。」

辨「畏つて候。まづ考へ出したることは、我等かく山伏に身を窶せども、包みがたきは我が君の御品格なり。畏れながら、暫く強力ぢからぢからに御身を窶され、御笠深く召され、我等の笈

富樫
名は家直

東大寺
華嚴宗の大本
山、聖武天皇
の建立、有名
な大佛がある

を負ひて、わざと後にさがつて御通りあれかし。ささなくば忽ちに見出され候はん。」

義「げにく、これは尤ものことなり。」

姿を窺し主従は、やうやく關に近づきて通らんとすれば、關の役人富樫左衛門、

富「やあく、山伏、關なるぞ、名をななれ。」

とぞ呼ばはりける。

辨「承つて候。これは奈良東大寺建立のために、北陸道を勸進する山伏にて候。」

富「それは殊勝のことなれども、山伏なるからは、この關は通しがたし。」

辨「して、そのいはれは。」

富「さればなり。頼朝・義經御不和により、義經殿には山伏と姿を變へて、奥州へ落ちさせらるゝ由。ゆるに諸國に新關を設けて、山伏を堅く留むるなり。一人も通しがたし。」

辨「承つて候。しかし、實山伏をこそ留めらるゝならぬ、まことの山伏を留め給ふいはれは候はじ。」

富「あらむづかし。論よりは證據なり。まこと東大寺建立の勸進ならば、勸



能の安宅

進帳のあるべきはずぞ。こゝにてそれを讀上げられよ。
某これにて聽聞せん。」

辨「何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候。」

もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中より有合せの卷物一つ取出し、勸

坪内雄飛

坪内逍遙自署

進帳と名づけつゝ、即智を以て文を綴り、まことしやかに聲高々と、天も響けと讀上げけり。富樫つくづ

く聞きすまし、

富「最早疑は晴れて候。御通り候へ。」

辨「忝く候。」

げにや紅は園生に植ゑても紛れなし。後に従ふ強力を、富



(宅安の劇) 慶辨

歌舞伎十八番の一に勸進帳といふ藝題がある。これは謡曲の安宅を脱化して長唄囃子を入れた演舞で、源義経が奥州落に際し、加賀國安宅關で關守富樫左衛門に見咎められ、已に危かつたのを、辨慶が南都東大寺の客僧と稱して勸進帳を讀上げ、富樫を欺いて虎口を脱したことを脚色した劇である。天保十一年河原崎座で演じたのが初で、市川海老藏(七代目團十郎)が辨慶に扮した。爾來辨慶は團十郎の特技とされ、殊に九代目團十郎は明治天皇の勸覧をさへ賜はつた。こゝに掲げた辨慶は松本幸四郎の扮装である。

樫目早く見咎めて、

富「いや、暫く。その強力は通しがたし。とゞまれ。」

と、のゝしりぬ。すは我が君を怪しむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立留る。

辨慶騒がずそらとぼけ、

辨「やい、強力め、何とて早く通らぬぞ。」

富「いや、それはこなたより留めたるなり。」

辨「そはまた何故。」

富「あの強力が姿、義経殿に似たるゆゑなり。」

辨「奇怪千万、義経殿に似たりとや。しか言はるゝ強力めは一生の名譽ならんが、さりとては腹立たしや。今日の中

に能登境まで行かんと思へばこそ強力雇ひたるに、僅かの笈を重げに負ひて人々に後るればこそ、貴人かとも怪しまるれ。憎さも憎し。いで、懲らしてくれん。」

金剛杖をおつとつて、さんくくに打擲す。これはと驚く人々を、辨慶目にて制し止め、なほも激しく打据うる。富樫やうやく疑念を解き、

富「これは我等が誤なり。その強力には構ひなし。疾く疾く一同御通りあれ。」

いふに人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらばくと立上り、關路を後にしづくくと、奥州さして下りけり。

吉田絃二郎

名は源次郎、佐賀縣の人、明治十九年、早稲田大學講師

二八 三月

吉田絃二郎

三月といふ言葉はいゝ言葉だ。

なるほど、まだ雪も降る、地も凍てついてゐる。けれども、三月といふ言葉を聞いただけでも、かじかんでゐた手足が伸びくして來るとともに、心までが躍る。

野の木立の蔭には、まだ消えがてに雪が残つてゐることもある。樺に圍まれた農家の草葺屋根の北側の勾配には、こちくくと雪が凍りついてゐることもある。

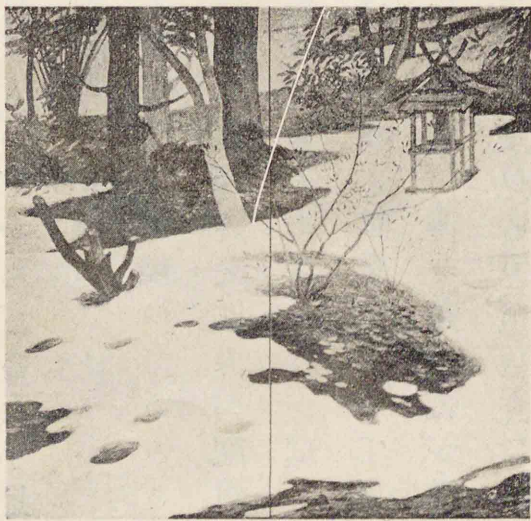
しかし、昨日まで雪の下に凍えてゐた枯草を分けて見ると、青い芽生えよりも先に、既に柔かな可憐な花の蕾が準備されてゐる。そつと地に掌を當てて見ると、地は既に眠か

ら覺めてゐる。地の胸には
既に春の血が暖く通ひ初め
てゐる。

小暗い竹藪の下には、既に
木瓜はくわが地から二三寸の處に
紅い唇を綻ばしてゐる。麥
は五六寸に伸びてゐる。地
平線はかげろひ初めてゐる。

二十前後の若い人達が、その若い日を踴躍するほどに有
難く思ふのは三月である。

三十代・四十代の人達が、嚴寒の冬を忍んで春を迎へ得た



(筆郎太孝原長) え消らむの雪

心をしみじみと感じるのも三月である。

五十代・六十代の人達は三月を何と感じるか知らぬが、恐
らく三月を待つ人の心は、老いてもくゞ變らぬであらう。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや、

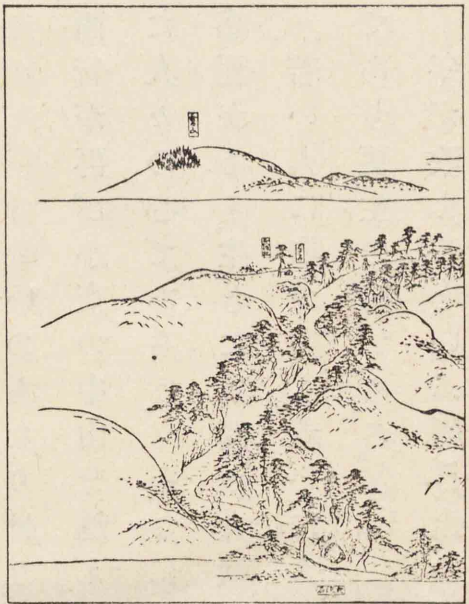
いのちなりけり小夜の中山。

西行が再び小夜の中山を越えた日のこの思は、三月を迎へ
た人々の心であらう。そこには涙ぐましいほどの生への
感謝がある、生きた人間の大歡喜がある。

若い人に取つても、老いた人に取つても、三月は解放の時
であり更生の時である。

年が改まるといふ曆日上の事實からいふと、一月が來た

年たけて
新古今集にあ
る
小夜の中山
靜岡縣小笠郡
にある
西行
俗名は佐藤義
清、鎌倉時代
の歌僧、建久
元年(一一九〇)
年七十三歿



小 夜 の 中 の 山

時、人間は過去の一年を
生き延び得たといふ感
謝やら喜悅やらに打た
れる筈であるが、實際は、
三月の光を見、三月の明
るい室や、柔かな風に接
した時、始めて心から「我

生きてあり。」といふ感激に浸されるのである。
人間ばかりではない。風それ自身、空の色それ自身、草木
も、水も、雲も、凡べてが三月になつて始めて「我も生きてあり。」
「我も生きてあり。」といった風に、喜び蠢うごめきつゝある。せゝら

ぎの畔ほとりに小さい毛毯のやうな猫柳の芽を見るのも三月で
ある。雪解の水が里を流れては燈心草を微に揺つてゐる。
そこにも三月の心が動いてゐる。
私達は生きてゐるんだ！
私達は今生きてゐるんだ！
地にも、雲にも、水にも、燈心草にも、三月の喜が揺れてゐる。
微かではあるけれども、何といふ素直な無邊大な歡喜であ
らう。
その歡喜を十分味ふがいゝ。
小智慧を働かすことは止めてしまふがいゝ。
靜に三月の土を歩むがいゝ。

靜に燈心草の揺れるのを見守るがい。

時々空を仰いで見るがい。

夜道を歩いて、いろ／＼の事を考へて見るがい。

霧が道を罩めてしまふであらう。

時としては地に突つ伏して泣きたくなるであらう。

何のために生きてゐるんだ。

三月の夜、孤坐して、泣出したいやうな氣持にならずに居ようか。

生きてゐることが堪らなく有難いからだ。

貧しい者の三月、放浪者の三月、悲みを抱く者の三月、喜を持つ者の三月、凡べての人々に取つて三月は恵まれてゐる。

憂鬱な冬は人間に自然を恐れることを教へた。三月は人間に始めて自然を懐かしむことを教へてくれる、母のやうに自然に頼ることを知らしてくれる。

三月の地を撫でて、そこに私達の喜の呼吸を埋めるがい、私達の涙を埋めるがい。

青春幾度ぞ。生れたものの喜と、生れたものの寂しさとを、地に伏して訴へるがい。

三月の光は、冬の間虐げられてゐた私達の肉體に、筋肉の端々までも解放の喜を感じさせるが、私達の心は更にそれ以上の解放の喜を感じる。それと同時に、冬の間じつと抑制することを教へられてゐた感情が、草とともに燃えて來

る。追憶が頭を擡げて来る。じつとしては居れなくなつて来る。

縁側に出て、柔かな日の光を浴びながら、長い冬の間メリヤスのシャツShirtsに深く包んでゐた腕をまくつて、自分の筋肉をしみぐくと珍しげに見入るのも三月である。

しみぐくと自分の腕に見入ると同じやうに、また自分の心の影をしみぐくと眺め入るのも三月である。

二九 三等列車

松岡讓

松岡讓
新潟縣の人、
明治二十四年
生、文學者

ごみぐくした三等列車は、昨夜からの人いきれて、朝になつてもまだ濛々と烟つてゐた。ちやうど冬の間だけ雪の

降らない地方へ出稼に出て小金を懐にした連中が、雪消とともに勢ひこんで元の古巢へなだれこむ季節なので、車室の中の賑はひは全く喧噪を極めてゐた。車室の中ほどには、大工らしい屈竟な男が七八人、元氣でへうきんな掛聲もろとも、餘念なく藤八拳けんを戦はしてゐた。そこから二つ三つ座席を隔てた所では、これも同じく逞しげな職人體ていの男が四五人、てんでに素焼の茶碗を献酬しては、色々な俗謡を唸つてゐた。

身動きの出来ないぐらゐ多くの人が、車室の中にぎつしり詰つてゐるのに、まだプラットフォームの人波を泳ぐやうに乗切つて、人込からはみ出した人々が、無理無體に車内

へ割込まうとしてゐた。すると、先に乗込んだ職人連中が、扉の把手をしつかり内から引いて置いて、わざと窓から首を出して、新來者を威嚇するやうに立ちはだかつた。此處彼處に小競合こけいごが始まつた。する内に列車が動き出すと、車内では誰彼の區別なく、思はず「万歳」の関の聲を爆發させた。それがプラットホームの見送人に傳染すると、今度は見送人から次の車へ傳播して行く内、汽車は万歳聲裡にまるで出征軍人を乗せたかのやうに停車場を離れた。

今の万歳に景氣づいた車中は、それきり熱を下げないで、はしやぎ通しにはしやいだ。最初黙つて澄ましてゐた者までが、この場の空氣にかぶれて、追々負けずに囃したてる

やうになつてからは、とう／＼車中残らずといつてもいゝぐらゐ、無禮講の懇親會みたやうなものになつてしまつた。それでも眞夜中の三四時間は、さすがに遊び草臥れたと見えて、ひつそりしたが、その僅かな休息の時間が過ぎると、もう夜明前から、又昨夜の續きが始まつた。しかし、汽車はただ送ることだけに責任と興味を感じるかのやうに、さうして何の爲に何を乗せて送るかについては、てんで目をつぶつたやうに、ひたはしりに目的地へ走つてゐた。車窓をよぎつて柔かな陽炎かひんに包まれた大きな山の幾つかの巒が、とろんと淀んだ薄紫を湛へて、遠く近く緩やかに又せはしく様々に走つた。さうして巒の走るにつれて、ぞ

の嶺を迂る大きな弧線がする／＼と傾いたと思ふと、それが落ちきらない間に、又新しいみづ／＼したぼうつと烟りかけた線が、ちやうど銀色にぼかされた兎の背のやうに、ふんはりと現れて來た。と、近い山の大きな背と背との間に、遠い連山が水晶のやうな眞白い波頭をくつきりと擡たげてゐた。車窓から見える天地には、山から麓麓の村から平野へかけて、一面に水蒸氣がとろんと淀んで、それに春の日は、懶もさうにあたつてゐた。

けふは汽車の烟さへ、まるで白い飴細工か、それとも兎の毛をまるめたマMatteッフルか何かのやうに、のんびりと水の溢れた田の面に白い影を浮かして、飛去りもせず、兒童の畫い

た汽車の烟そのまゝ、後から／＼幾つも輪をなして繋がつてゐた。

山の麓の村々に所々白く見えたものは、大方梅が満開なのであつたらう。

海岸を離れてから、幾つも山懷を突破つて進んで來ると、愈、故郷の停車場が近づいた。別を惜しむといつた氣持の働くものと見えて、どこかにやけな騒々しさが際立つて車中を占領して來たが、私は早く停車場に着けばいゝ、さうして一時も早く、この亂雑な、せゝこましい息のつまりさうな場所から逃れたいと思つた。

大きな河の鐵橋の赤い支柱が箴きざのやうに行過ぎると、故

郷の村を抱いてゐる大きな山懐が、遙か一體の青黒い霞を隔てて、心持せりのぼつた平野の果に眺められた。さうしたマツ〔橋す〕チ箱のやうな小さい停車場は、すぐ窓近く現れて來た。此處まで來ると、女工の群が大部分腰を立てた。大工連中が網棚から荷物をおろし始めた。見る／＼乗客の三分の一ぐらゐるが騒々しく立上つた。私はこの不行儀な出稼人達が大部分土地の人らしいのを見ると、妙に當惑した。さうして自分も同じくこの停車場へ降りるのが、何となく恥かしくて、後めたい氣持がした。（法城を護る人々）

自修文

三〇 平民宰相立志物語

原敬 盛岡市の人、
政友會總裁、
内閣總理大臣、
大正十年六月十六日歿、
作人館の子弟を教育する學校

那珂通世 盛岡市の人、
漢學者、
東京高等師範學校教授、
明治四十四年五月十八日歿



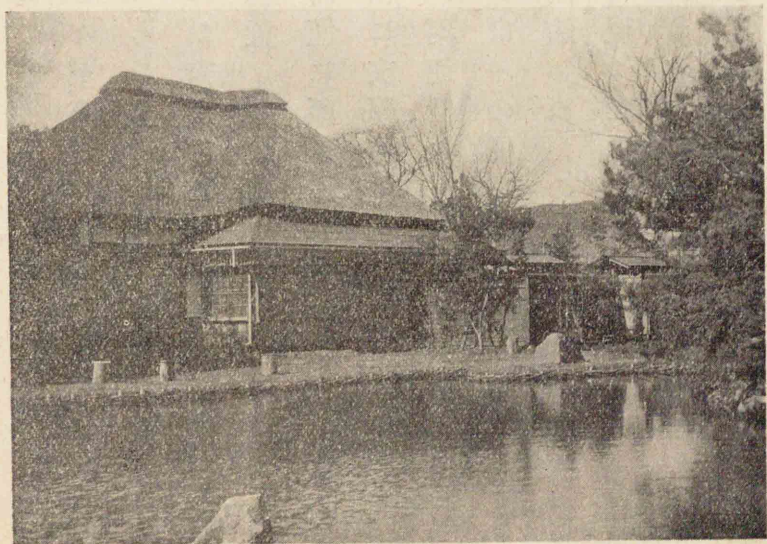
原敬

我が國最初の平民宰相原敬さんが、志を立てて故郷を出たのは明治五年で、十六歳の時だつた。それまで作人館の修文所に學んでゐた原さんは、世間に有りふれた秀才物語と同じく、學友の間に神童と呼ばれるほど頭が良くて、當時僅に原さんと轡を並べ得たのは、後に文學博士となつた、今は故人の那珂通世さんだけだつた。併し、これほどの俊秀も、修文所が間もなく閉鎖されたので、學ぶべき學校がなく、當時流行の東都遊學を志すに至つたのである。

原さんは五百石取の若様ではあつたけれども、次男坊ではあり、且殿様が二十万石の南部領から奥州白石（しやうしやく）の十三万石へ轉封を命

周章
あわてること
狼狽
うろたへること

ぜられたため、一藩擧げて周章
狼狽、上は家老から下は小身者
に至るまで、お家重代の寶物を
賣捌いて、危く其の打續く貧乏
に堪へる状態で、無論原さんの
家も其の例には洩れなかつた
のだ。そこで、折角原さんが東
都遊學の志を立てたとて、固よ
り學資のあらう筈はなく、殊に
此の頃から負嫌ひで剛情我慢
であつた原さんは、俺のことは
俺で處分するんだ、貧乏な瘦世
帯の世話になることはない。」と



原敬の生家

南部富士
岩手山、盛岡
市の西方、海
抜六八三〇尺
幻影
まぼろしのか

言葉を構へ
る
口實を作る
郷黨
里の人々
さ、やか
小さい

ばかりに、僅かの路銀を懷中にして、當時同藩の生徒だつたMとH
との三人連れて、燃盛る青雲の志を抱いて、勇しく故山を出たので
あつた。——季節は丁度南部富士の雪が解けて、街を貫く北上川の
堤に蝶の飛交ふ頃——柔かな春の日射しをぼか／＼と浴びて、奥
州街道を西へ上る此の三人の若人達は、出世の幻影に心がときめ
くので、路銀の乏しい旅路もさほど苦痛には感じなかつた。

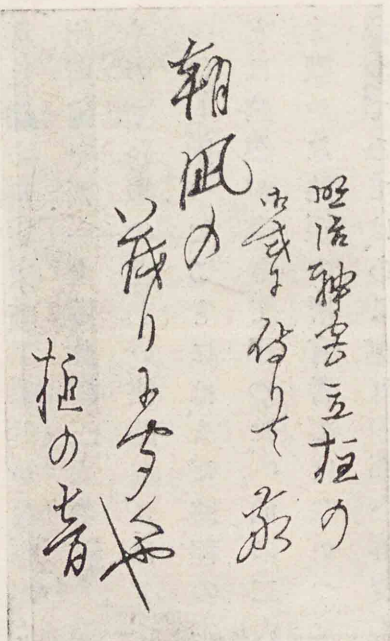
併し、困つたことには、まだ路程の半ばにも達しない仙臺で、原さ
んは路銀が盡きて了つた。他の二人とて、固より原さんに恵むほ
ど豊かな路銀の所有者ではなかつたので、金のない原さんに掛り
合つてゐては、あこがれの都へ落着く日が遅くなるとでも思つた
ものか、言葉を構へて一足先へ行つてしまつた。——行かうか、路銀
がない。歸らうか、郷黨に合せる顔がない。それでも、燃えしきる
青雲の志を何としよう。——木賃宿にも等しい仙臺のさ、やかな

拱こま組ぐみ

思案投首しあんとうしゅ
考へ込んで首
をかきつけてお
ること

明治神宮立
柱の御式に
侍りて
朝風の茂りに
敬
聞くや槌の音

旅籠屋はたごやの一間で、薄暗い行燈の影に思案の腕を拱いた原さん、それは、後年多くの政敵を向ふに廻して、天下の權を握る術を考へた以上の思案であつた。所が、原さんは決して神様から見捨てられて



原 敬 筆 蹟

はゐなかつた。……といふのは、隣室に泊つてゐた一人の旅商人が、思案投首の此の少年を哀れに思つて、「俺は東京深川のこれ〜と云ふ者だ。それほど東京へ出たいならば、俺が連れて行つてやらう。」と、親切な救ひの言葉を掛けてくれたことであつた。斯くて原さんは此の旅商人の荷物などを持つて、陸前の荻の濱

サラリーマン
俸給で生活する人、月給取
郵便報知
今の報知新聞

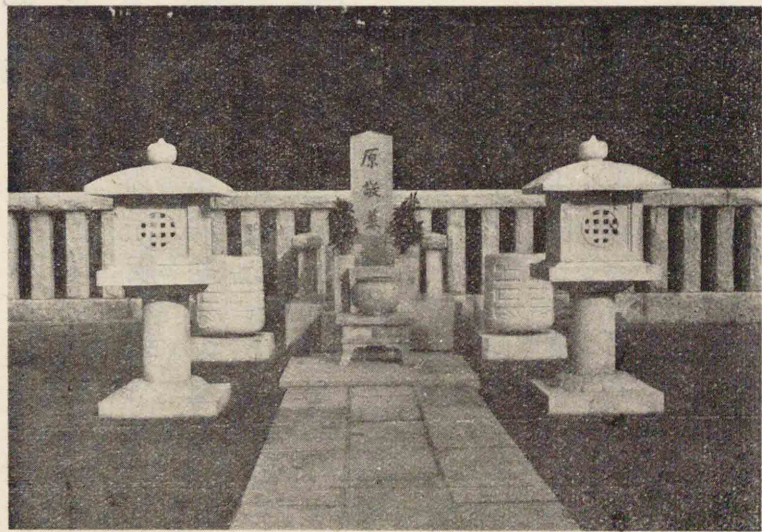
から海路遙に品川へ着いた。此の商人は船の中でもなにくれと原さんを劬いたつて、「君は何が得意だ。あてなしに東京へ出たとて苦しむばかりだ。得意なものがあるなら、それで飯を喰たべることにするが好い。」などとも言つた。原さんは、此の時、幼少の頃から工藤經方といふお師匠さんに就いて學んだ洋算のことを思ひ出し、數學ならいくらか出来る。と答へたものであつた。そこで、深川へ着くと、此の男の世話で、原さんは月俸金四圓也で、某小學校の數學の先生となつたのであつた。——世間では、サラリーマンとしての原さんの振出しを、「郵便報知時代の記者生活だと思つて居るけれど、是より先、原さんは既に教師として俸給生活の味を知つてゐたのであつた。而も米一升が二錢で買へるといふ當時、僅か十六歳の東北の田舎者が、東京の盛り場はげで四圓の月給を取るとは、餘程の成功と謂つても好いのであつた。後年此の話が出た時、原さんは

開拓
ひらく

自分の運命を開拓してくれ
此の恩人の名を忘れたことを
頗る残念がつたといふ。

話は飛んで、三年前、盛岡市古
川端の自邸に舊友を招いて打
寛いだ原さんは、時恰も居合せ
た東京上りの仲間の一人Mを
捉へて、君は苦しくなつて故郷
へ歸つたから駄目だった。僕
などは如何に苦しくても斷じ
て歸らないと心に誓つたもの
だよ」と語つて、成功兒として
誇の色に榮えたあの無髯の顔

無髯
ひげなし



原 敬 の 墓

落魄
おちぶれるこ
と

田原坂
熊本縣

懸隔
へだたり

を打崩して、朗かに笑つたさうな。東京上りの仲間と云へば、Mは
苦勞の甲斐もなく落魄して、原さんの世話で某會社に勤め、Hは入
京後刻苦勉強して警視廳巡查となり、小警部にまで昇進したが、西
南戦争の時に田原坂で討死して了つた。
故山を出る時、三人の若人の抱いた青雲の志は相同じかつたけ
れども、銘々に開かれた運命の扉は、餘りに其の懸隔が大き過ぎた
のであつた。（東京日日新聞に據る）

竹越與三郎
號は三又、
新潟縣の
人、慶新
應元年生、
貴族院
議員

三一 功名心

竹越與三郎

功名心は虚榮心ではない。虚榮心は心の卑しい婦人の
有つものである。心の卑しい婦人は、左右の手に五六個の
指環を嵌め、其の燦然たる光によつて同輩に誇り、或は流行

の衣服を着て以て傍人に誇らうとするが、若し此の指環を注視する者がなく、此の衣服を望見する者がなければ、其の心に淋しさを感じずるものである。斯様に虚榮心は他を嫉つて己を慰めるものである。



竹越與三郎

功名心はさうでなく、大きな人格から湧出る一の波動で、恰も大きな鐘が大きな音を出すのと同じである。功名心は己自らに對して満足を得なければ止まないものである。他人は攻撃してもよい、嗤つてもよい、又褒めてもよい。自分は自分で自分の爲さうと思ふ所を爲さねばならないのが功名心で

ナポレオン
佛國の皇帝
(1769-1821)

桓溫
字は子元、東
晋の人

クロンウエル
英國の政治家
(1705-1790)



ナポレオン

ある。〔茶破翁〕ナポレオンが之を註釋して、功名心は豪傑の欲情にして、これあるものは、或は大善をなし、或は大惡をなす。唯其の主義の善惡如何を問ふべきのみ。」と言つたのは、流石に功名兒だけあつて、能く其の消息を言盡したものと謂つてよい。晋の桓溫は、男子芳を百世に流すこと能はずんば、當に臭を万世に遺すべし。」と言つた。固より臭は人の過ぎないが、最も能く功名兒の好大心を表明して居る。

ロンドンウェルは大統領の位に即いた時、ロンドン市民が雲霞Chonwellの如く集つて其の行列を眺めるのを見て、冷然として笑つて、我が頸若し斷頭臺に登らば、此の群集は更に多く集るべし。」と言つた。功名心の虚榮心



ルエウソロウ

でないことは、即ち是に由つても知ることが出来る。

功名心は必ずしも成功するとは限らない。時には成功することもあるが、又時には失敗することもある。併し、成功するにせよ失敗するにせよ、とにかく功名心のあるものは幸福である。と云ふのは、功名心その物の中に幸福がある

からである。功名心のある者は、眼前英雄と相對するが如く、常に其の心は倦まないのである。自分は此の英雄の爲した所を爲さなければならぬ、自分は此の英雄の爲した事業よりも更に大きな事業を爲さねばならないといふ心を有つて居るから、春が去らず、少年の心が失せず、老が來ず、常に若々しい心を有つて居ることが出来るのである。

人生に於て希望ほど重要なものはない。たゞ一の希望があれば、大洋に於て呑天の波濤に圍まれた難波船の中にあつても、水夫は尙其の努力を廢しないのである。たゞ一の希望があれば、醫師が其の術の盡きたのを自白しながらも、尙病人の血脈の動く間は方法を試みようとするのである。

る。たゞ一の希望があれば、僧侶が最後の祈禱を捧げる時に於ても、囚人は尙其の生を期するのである。こゝに希望があればこゝに生命がある。一分間の希望があれば一分間の生命がある。功名心は人をして無限の希望を懐かせるものである。無限の希望を懐く者は無限の青春を有するものである。(惜春雜話)

現代國語讀本 卷二 終

附 録

常 用 略 字

(百五十四字。下の字は字典體) (臨時國語調査會決定)

勸(勸)	権(權)	漙(漙)	欽(欽)	観(觀)	挙(舉)	誉(譽)	断(斷)	継(繼)
沢(澤)	択(擇)	訳(譯)	駅(驛)	釈(釋)	齒(齒)	齡(齡)	湿(濕)	顯(顯)
変(變)	恋(戀)	蛮(蠻)	灣(灣)		窓(窗)	総(總)	属(屬)	囁(囁)
莖(莖)	徑(徑)	經(經)	輕(輕)		為(爲)	偽(偽)	带(帶)	滞(滯)
併(併)	塀(塀)	瓶(瓶)	餅(餅)	研(研)	参(參)	惨(慘)	兩(兩)	満(滿)
斉(齊)	齋(齋)	濟(濟)	剂(劑)		兎(發)	廢(廢)	单(鼠)	獵(獵)
残(殘)	浅(淺)	賤(賤)	錢(錢)		乱(亂)	辞(辭)	潜(潛)	賛(贊)
劳(勞)	营(營)	荣(榮)	学(學)	覚(覺)	走(走)	徒(徒)	従(從)	縦(縦)

常用略字

困(圍)	刺(刻)	虫(蟲)	独(獨)	虚(虛)	庶(鹿)	竜(龍)	楽(樂)	寿(壽)	担(擔)	恼(惱)
囀(圓)	剌(勵)	蚕(蠶)	触(觸)	戲(戲)	蔗(麗)	滝(瀧)	薬(藥)	鑄(鑄)	胆(膽)	腦(腦)
図(圖)	嘗(嘗)	仮(假)	疊(疊)	遅(遲)	聴(聽)	随(隨)	読(讀)	数(數)	未(來)	処(處)
壺(壺)	国(國)	兒(兒)	撮(撮)	解(解)	廳(廳)	髓(髓)	続(續)	楼(樓)	麦(麥)	拠(據)
党(黨)	体(體)	双(雙)	辺(邊)	証(證)	台(臺)	称(稱)	画(畫)	气(氣)	叙(敘)	実(實)
亀(龜)	鬪(鬪)	靈(靈)	医(醫)	豊(豐)	旧(舊)	糸(絲)	画(畱)	炉(爐)	条(條)	写(寫)
塩(鹽)	余(餘)	鉄(鐵)	弁(辯)	万(萬)	欠(欠)	尽(盡)	犧(犧)	様(様)	宝(寶)	宝(寶)
点(點)	館(館)	関(關)	遞(遞)	号(號)	声(聲)	礼(禮)	献(獻)	帰(歸)	扣(控)	扣(控)

現代國語讀本

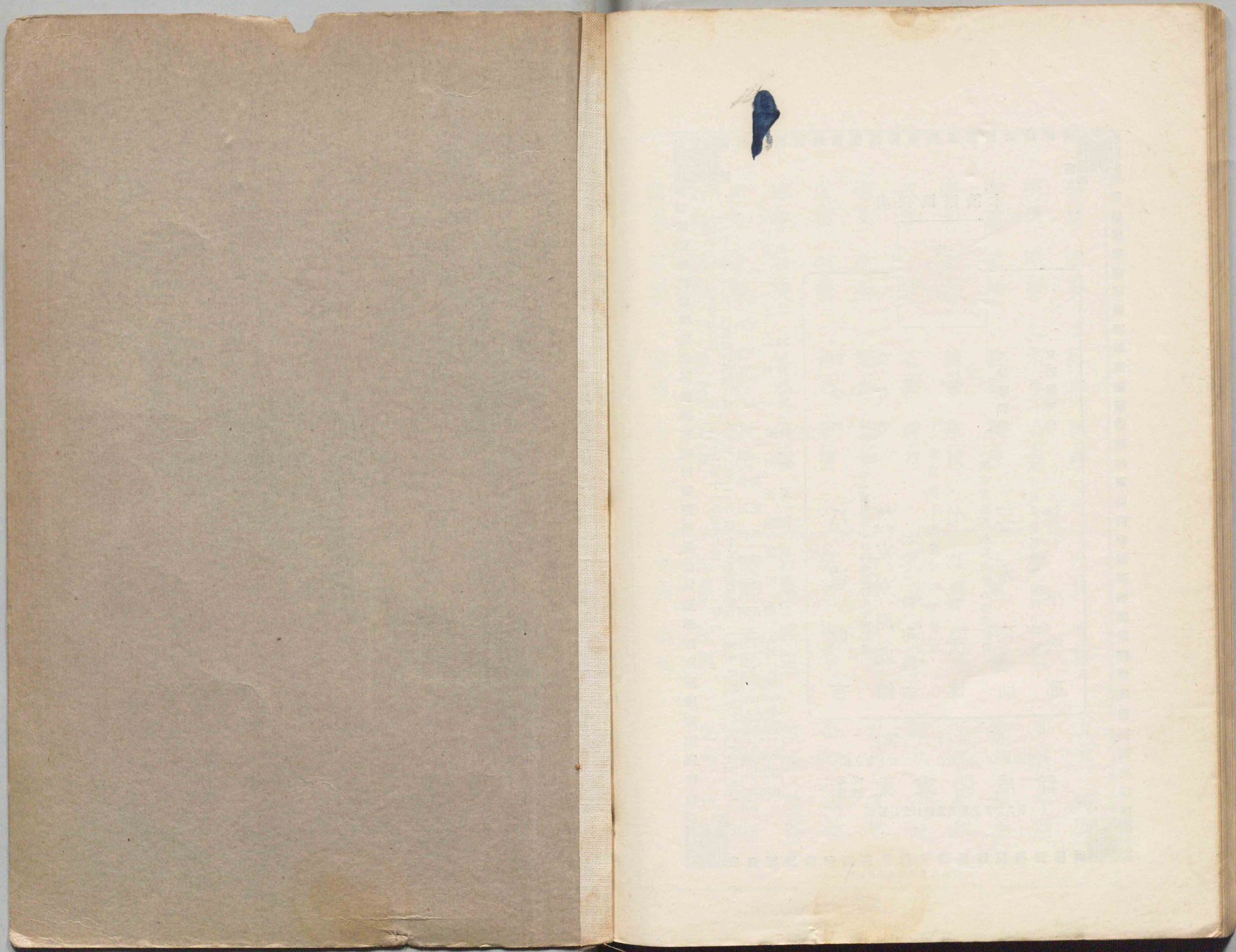


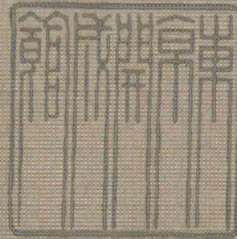
著者 八波則吉
 發行者 株式會社 東京開成館
 代表者 松本繁吉
 印刷者 竹内喜太郎
 西部販賣所 大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角 三木佐助
 東部販賣所 東京市日本橋區數寄屋町九番地 林平次郎

大正十二年十一月廿七日印
 大正十三年一月一日訂正再版印刷
 大正十三年一月四日訂正再版發行
 昭和二年二月四日訂正再版印刷
 昭和二年四月四日訂正再版印刷
 昭和二年四月四日訂正再版印刷

現代國語讀本 昭和三年臨時定價
 卷一：二四拾七錢七拾八錢
 卷二：六四拾六錢七拾六錢
 卷三：六四拾六錢七拾六錢
 卷七：十四拾參錢七拾壹錢

發行所 東京市小石川區小日向水道町八十四番地
 株式會社 東京開成館
 振替口東京五三二番





広島大学図書

2000038373



麻
27
73